

2019年12月1日 **No.27**
ニチメン東京社友会
〒100-8691 千代田区内幸町2-1-1 飯野ビルディング 17F
URL <http://www.menkwa.com>
E-mail menkwa@sojitz.com

【目次】

【ページ】

1. 「飯野ビル全景」・「双日(株)オフィス 周辺の案内図」			2
2. 2020年新年賀詞交歓 開催のお知らせ			3
3. 2019年度 総会・懇親会 開催報告			
① 挨拶	会長 石原 啓資		4
② 来賓ご挨拶	双日(株)代表取締役社長 藤本 昌義		6
③ 総会・懇親会報告	広報チーム		7
④ 乾杯の音頭	石原 靖造		8
付録：総会出席者名簿・会場写真			
⑤ 2018年度事業報告および収支報告、2019年度事業計画および収支予算	世話人 榊山 俊次		13
4. 会員動向および その他報告事項	世話人 榊山 俊次		15
5. 会員寄稿文			
① 「棲み分けの進化論」	山邑 陽一		18
② 「無常について」ゲーテと道元、そして道長など	竹内 可能		19
③ 「中国で美味しい麺」	中田 龍彦		25
④ 「超人図鑑」誕生秘話	芳賀 信明		29
⑤ ブラジルーポルトガルー日本ー Saudadeの旅	山邑 陽一		31
⑥ 進化する企業の情報活用	中川 十郎		33
⑦ ミステリ小説断想 (10)	福富 直明		37
⑧ 社友会ウオーク (都内庭園めぐり)	大羽陽一郎		39
⑨ もう見たくない、民放テレビ	倉持 次雄		42
⑩ ニチメンアーカイブス (あのビルに会いたい)	奥村 睦夫		43
⑪ オー・カル Катタからヘルシンキまで	長谷川 洋		45
6. OB会、OG会、同好会ニュース			
① 第7回ニチメン・シカゴ会	保科 孝		48
② 第32回如月会 (ニチメン経理部OB会)	浅利 眞司		51
③ 一木会開催報告	奥村 睦夫		53
④ 「俳句の会」いろは句会	佐藤 英二		56
7. 追悼文			
① 大村譲さんの思い出	吉川 浩		57
② 大村譲さんのご逝去を悼む	長谷川 洋		58
8. 会員名簿 (令和元年9月30日現在)	事務局		59
9. 計 報 (2019年1月~2019年8月)	事務局		62
10. 社友会役員・世話人一覧表ならびに連絡先	事務局		63
11. 編集後記	奥村 睦夫		64

飯野ビル全景



ビル正面入口から受付フロアまでの
直通エスカレーター



双日(株) オフィス 周辺の案内図

〒100-8691 千代田区内幸町2-1-1 飯野ビルディング



地下鉄アクセス メトロ千代田線・丸の内線・日比谷線「霞ヶ関」下車、出口C4
メトロ銀座線「虎ノ門」下車、出口9

***** 2020年新年賀詞交歓会のお知らせ *****

恒例の賀詞交歓会を下記要領で開催致します。皆さま、奮ってご参加下さい。

開催日：2020年**1月16日**(木) 開会**11:30AM**

ご注意！ 開会は 11:30AM です（12:00 Noonではありません）。

なお、会場は 11:00AM から開けておきます。

会 場：**双日株式会社本社・21階 大会議室**

東京都千代田区内幸町2-1-1（飯野ビル内）

アクセス（メトロ）：

*千代田線・丸の内線・日比谷線「霞ヶ関」**出口C 4方面**へ進み、
通路天井の案内板に従って、館内エスカレーターで**3階オフィスロビー**迄。

*銀座線「虎ノ門」下車、**出口9**。飯野ビル迄徒歩5分程度。

会 費：**無 料**（飲物、軽食を用意致します。）

特記事項

AAA 同封のハガキで**出欠**をご返事下さい。**締切12月18日(水)必着**。

BBB このビルはセキュリティ確保のため、**入館カード**が必要です。

3階ロビーの双日(株)受付付近で待機している社友会担当世話人に氏名を告げて、このカードを受け取った上、ゲートを入れて下さい。

ゲート出入りの要領は、SUICAやPASMOの使い方と全く同じです。

また、このカードは退館の時も必要です。それまでは必ず手元に保管下さい。

* その他、お問い合わせは、「世話人一覧表」記載の世話人か、または、社友会事務局にお寄せ下さい。FAXは03-6858-7216、Eメールはmenkwa@sojitz.comです。

2019年東京社友会総会・懇親会における 会長挨拶

会 長 石 原 啓 資



ただいま、ご紹介いただきました会長の石原でございます。お暑い中と原稿に書きましたが、梅雨のうっとうしい中多くの会員の皆さまにご参集いただき、まことに有難うございます。お元気な会員の皆様方と半年ぶりに再会できこの上ない喜びです。

また、本日はお忙しい中、双日株式会社藤本社長様はじめ、多数のご来賓にご出席を賜りまことに有難うございます。心より御礼申し上げます。

さて、本年5月1日から新たな元号「令和」がスタートいたしました。「令和」は英語では「美しい調和」と訳されるようです。新時代の幕開け、米国からトランプ大統領ご夫妻が5月下旬、国賓として来日されました。お迎えになった天皇・皇后両陛下が、通訳を介することなく、大統領ご夫妻とにこやかに会話されているご様子は大変印象的でありました。新しい皇室が国際親善に今後益々ご貢献いただけるように感じた次第です。

先日のG20大阪サミットでは、全体会議はさて置き個別首脳会議が盛んに行われ「G2ではないか？」と、揶揄されました。世界が一つになって解決すべき懸案事項は多々あり、互いに価値観の相違を認め合える世界の構築を目指してほしいと思います。自国第一主義、イデオロギーのぶつけ合いを残念に感じていますが、日本国として、立ち位置が非常に重要になってくるのではと思っています。

国内に目を向けますと、参議院選挙最中で各政党ともいろんな課題を掲げ選挙戦を戦っていますが、時代の変革についていけないのは政治家ではないかと強く感じています。この20年の間に世界は大きく変化いたしました。仕組みが大きく変わり、流れに乗り切れない輩は淘汰され社会から排除されました。経済界では、マイナス金利にて既存の収益構造がダメージを受け、仮想通貨やAIを活用した新しい取り組みの大きなうねりの中で、特に金融業界のビジネスモデル変革が必至になっており、将来を見据え、時代の先取りをしたビジネスモデルの構築に取り組んでおられます。これに対し、政界は目先の枝葉末節の議論に終始し、令和の新時代、日本国のあるべき姿を示し、新時代に即した具体的道筋を実行されることが不可欠と感ずますが、自らの立場を守ることに終始する現状の大多数の政治屋には失望しています。米国の著名人の言葉に「政治屋は次の選挙を考える、政治家は次の時代のことを考える」とあります。まさに今の日本が当てはまるのではと感じています。今回の選挙で少しでも光明が見出せば嬉しいのですが。

米中貿易戦争で端を発し世界経済に暗雲が垂れ込めて、少し流れが良くない方向に変わりつ

つあるのではと心配しています。斯様な厳しい環境下でも、双日株式会社は2019年3月期決算にて当期純利益704億円を達成されました。今後、更に厳しい経済環境が想定されるかと推察されますが、最近盛んにTVコマーシャルで目にする「発想+双日」(HASSOJITZ)をフル活用して三か年計画の最終年度のコミットメントを達成されること期待しています。

後ほどの総会にて昨年度の収支報告、本年度の収支予算を諮らせていただきますが、会員数の減少にて年々会費収入が減ってきております。歳出の削減に引き続き努めてまいります。ご出席の会員の皆様におかれましては、新規会員の勧誘にお力をお貸しいただきたくお願い申し上げます。

我々世話人会一同、総会・懇親会と、新年会にて会員間の親交を深められ楽しく過ごしていただき、笑顔でお帰りいただけることを最優先に努めさせていただいております。本日もお楽しみいただき、来年の新年会での再会を楽しみにしています。

最後になりましたが、会員の皆様が暑さに負けずお元気でお過ごしになれること、双日株式会社の業績が継続的に発展を遂げることを祈念いたしまして、私の挨拶とさせていただきます。

ご清聴ありがとうございます。

少しお時間をいただき、お伝えしたいことがございます。

2年に一度発行しておりました会員名簿につきまして、個人情報管理の更なる重要性に鑑み、管理体制の強化が必要になってきております。一昨年に発行しました名簿を最終版として、今後ご変更が有り次第、事務局に連絡していただき、会員名簿を事務局にて一元管理する運営方針に変更させていただきます。

皆様にご不便をおかけするかも知れませんが、なにとぞご理解のほどよろしく願いいたします。

どうもありがとうございました。



2019年度総会・懇親会 来賓ご挨拶

双日株式会社 代表取締役社長 藤本 昌義



皆さま、こんにちは。社長の藤本でございます。

皆様とは新年会以来となりますが、改めて、ニチメン東京社友会におかれましては、石原会長を始め事務局の方を含めた皆さまに、社友会の運営など多大なご支援を頂いており、この場をお借りし厚く御礼申し上げます。

まずは昨今の当社の状況について報告をさせて戴きます。

今年も4月に新入社員が入社しました。今年の新入社員は123名にのぼり、社内に澁刺とした若いエネルギーをもたらしてくれています。変化の激しい時代において、双日のこれからを背負って立つ若者の感性にも多に期待しておりますところでは。

この新入社員123名のうち、55名が女性です。当社の女性活躍に向けた取り組みが評価され、女性活躍推進に優れた上場企業が選定される、なでしこ銘柄に3年連続で選定されました。これは商社では初、ということでございます。

仕事に求められる厳しさは変わりませんが、社員が生き活きと能力を発揮できるように、またそうして優秀な人材を確保し、会社の力を継続的に上げていけるように女性活躍推進のみならず、働き方改革にも当社も積極的に取り組んでおります。

さて、先日5月8日には2018年度通期決算の発表を行いました。2018年度の当期純利益は、前年度比136億円増の704億円となり、過去最高益を更新しました。新中期経営計画2020では来年度2020年度末に当期利益750億円の達成を目標としており、2年目の今年、2019年度は当期利益720億円を目標に据えています。

これまでのところ経過は順調ではありますが、米中貿易摩擦や、混迷を極めるイギリスのEU離脱問題、再び緊迫感を増す中東情勢など、世界経済は不安定感を増しており、引き続き引き締めて舵取りにあたる所存でございます。

6月20日には双日としての16回目となる定時株主総会を開催し、お蔭さまで無事に終了いたしました。皆様の中にも、双日の株主の方が数多くいらっしゃるかと存じます。この場をお借りし、改めて御礼を申し上げます。

双日発足から16年が経過していますが、5月にはバン格拉ディッシュのハシナ首相が来日された際に、安倍首相主催の首相官邸での晩餐会に私もご招待を頂きました。

また、同じく5月には在日アメリカ大使館でのトランプ大統領主催のレセプションに招待され、トランプ大統領と直接話をする機会もありました。招待された日本企業は限られておりま

した中に当社が出席しているという事は、経済界における当社のプレゼンス・認知度も確実に向上してきているという事でもあると思います。

平成の時代が幕を閉じ、5月1日から元号が「令和」となりましたが、社友会の皆様の元気とご声援を頂き、それを糧に、新たな時代においても双日が益々成長する姿を皆様にも引き続きご覧頂けるよう、我々も引き続き努力して参りますので、引き続き双日の成長にご期待、ご支援をよろしくお願い致します。

以上をもって、私の挨拶とさせていただきます。

御静聴、ありがとうございました。

Nmnm

第14回 ニチメン東京社友会「総会・懇親会」開催報告

広報チーム

7月18日（木）双日(株)本社21階大会議室をお借りし開催。

7月前半の涼しさを忘れたような暑さの中、今回も多くのご来賓を130名（別掲載出席者一覧）のご出席をいただきました。

11時に開場、11時30分の開会宣言が始まり、当会石原会長の挨拶、引き続き来賓代表として双日株式会社代表取締役社長藤本昌義様から挨拶いただきました。

⇒詳細は別ページに掲載しておりますのでご覧ください。

続き、新藤副会長を総会議長に選出し、総会議事に入りました。

総 会 議 事：

- ① 物故者への黙祷
- ② 役員人事
- ③ 2018年度事業報告、決算報告（別掲載資料）……………世話人 榊山 俊次
- ④ ③に関わる監査報告 …………… 監 事 大羽陽一郎
- ⑤ 2019年度事業計画案、予算案（別掲載資料）……………世話人 榊山 俊次

上記②③④⑤は、議長の一括承認要請に応え、満場一致で承認されました。

懇 親 会：

12時開会、石原靖造様の“乾杯”ご発声と皆様のご唱和により、会場は一気に賑やかに、テーブル一杯のお料理を求め歩く方、飲み物を探す方、話し相手を求める方など活発な動きが見られ、あちらこちらで笑い声、賑やかな輪ができ、皆さんがお互いの無事息災を確認され、次回の再会を約しておられました。

13時から恒例の集合写真撮影に入りました。別掲載の写真参照ください。

- * ご出席の御長寿者（最高齢は松尾憲一様：昭和2年5月21日生まれ）
- * 昭和34年亥年入社の方々（60年前の入社、皇太子結婚パレードの年）

13時30分の「中締め」、皆さん次回社友会会合、並びにそれぞれのOB会での再会を約して御開きとなりました。ではまた！

Nmnm

乾杯の音頭挨拶文

石原靖造



只今ご紹介頂きました食料出身の石原で御座います。
 本日は双日の藤本社長さん初め役員の皆さんが居られるこの席で、乾杯音頭のご指名を受けました事大変光栄に思っております。簡単にご挨拶させていただきます。
 先日日本経済新聞夕刊一面トップに大きく双日さんの名前が出ておりました。航空機のチャータービジネスに関する記事でしたが、双日さんのキャッチフレーズ、New way, New value と言うのは、この様なビジネスを指すのかと、興味深く読ませて頂きました。
 自分の勤めた会社の名前が大きく新聞に出るのは何とも嬉しいものでして、これからも New way, New value 精神でユニークな商いを開拓され、大いに新聞を賑わせて頂きたいと思っております。

あと一つ、少し手前味噌になりますが、皆さんご存知の様に、1978年、昭和53年にニチメンが旗を振って造成しましたゴルフ場、富士カントリー笠間倶楽部が茨城県の笠間市に御座います。

開場以来41年になりますが、開場時に発足しましたゴルフ同好の会“ニチメン笠間会”は今尚元気に走り続けて居ります。実は明後日20日には第320回記念大会を開催する事になって居ります。本日はこの席に仲間であります桜井潤一先輩、松村信男さん、吉本邦晴さん、吉本さんははるばる神戸から参加頂いて居ります。あと枡湯磐夫さん名幹事の久本紘一さんといった方々がお見えになっています。

ニチメン笠間会はその名前の通り、ニチメンの皆さんのものと言えます。何方でもゴルフのお好きな方は何時でもお気軽に参加して頂ければと思っています。大歓迎致します。

前置きが長くなりましたが、乾杯に移らせて頂きます。

双日株式会社さんの益々の発展と本日ご出席の皆様方のご健勝、ご多幸を祈念申し上げ、乾杯したいと思います。ご唱和をお願い致します。

“乾杯”有難う御座いました。

◎2019年 ニチメン東京社友会総会

2019.07.18開催

(一般会員)

ア 浅井正彦 東信子 甘利廣雄 荒木武雄 池永浩 石黒由紀子 石原靖造 五十畑利枝 泉伸夫 伊藤安雄 今村隆夫 大北克静 大大塚静子 大大野悦良 大大場禎治 大大平栗雄 大岡島岩男 岡田隆彦 沖田野賢次 小森正彦 少数田正博 金鎬木順治郎 蒲澤信男 川西勲己 川本寿彦 木寺厚二 金城弘明 倉又則夫 小西林重齐 小斎富 五月女 坂井啓潤 桜井

佐藤三朗 佐藤由紀恵 三分一克美 篠塚美郷 清水武人 須藤忠昭 陶山晃徳 夕 大工原正徳 高木恒久 高竹内可能 田尻眞啓 田中孝平 田中賢一郎 津田仁行 豊間根政行 十川一郎 中谷宜英 中原正紀 南部捷郎 西田武弘 西村弘男 野本定男 八 長谷川尚洋 長谷川博之 林正義人 林本絃一子 比留間玲也 廣本尾直 深富井正之助 福藤家章 藤古秀本 田

マ 牧洋生 梶渦磐夫 松尾憲一 松田邦夫 松村信男 水庫博夫 溝江博三 宮本正博 矢島孝章 安武国光 山田喜三 山田陽一 山本幸江 吉木健晴 吉本邦重 ワ 渡辺重幸

(大阪社友会会員)
金谷安勝

(社友会役員・世話人)
石原啓資 新藤孝夫 奥村睦夫 青木聡弥 赤城枝美 入江隆史 大羽陽一郎 北川幸雄 木津奈緒子 倉持次雄 近藤厚子 園山春一 丹下薫彦 中西村龍照

(50音順、敬称略)

蛭田恒美 梶山俊次 森田淑子

(会員) 支援者

阿久津佳子 市川伸江 垣田佐代子 滑川和子 堀典代

(双日関係ご来賓)

原大 藤本昌義 田中勤 平井龍太郎 櫛引雅亮 小笠原貴文 栗林顕明 宮部敏一 谷口真志 花井正志 松浦修章 河西俊茂 小倉俊之 山口俊樹 並真也

(非会員) 双日支援者

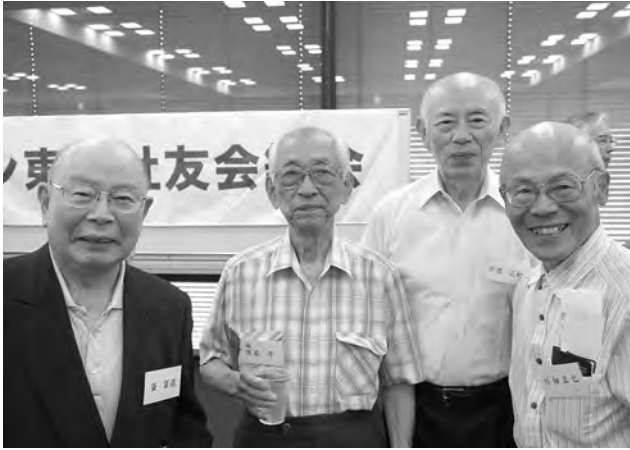
大熊恭子

- ①一般会員 90名
- ②世話人等 23名
- ③大阪社友会員 1名
- 合計 114名
- ④双日ご来賓等 16名

出席者数 合計
130名

2019年総会・懇親会風景





2019年総会・懇親会風景



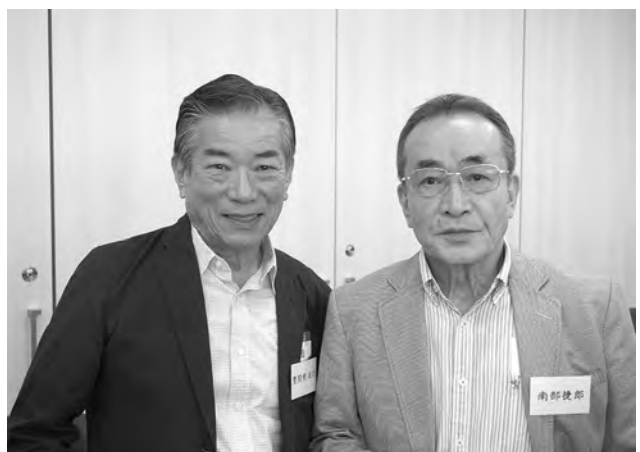
御長寿者



昭和34年入社の方々



2019年総会・懇親会風景



2018年度事業報告 及び 収支報告

(期間：2018年7月1日～2019年6月30日)

ニチメン東京社友会

I. 事業報告

	実績	千円 予算
第13回 総会・懇親会開催 (2018年8月2日) 139名参加	664	700
会報・名簿の発行 会報25号 2018年12月1日発行 同26号 2019年6月1日発行	811	800
ホームページの運用	175	350
第12回 新年会開催 (2019年1月22日) 146名参加	690	700
慶弔行事	641	700

II. 収支報告

A) 収入の部

1. 会 費	1,295	1,400
2. 双日助成金	2,500	2,500
3. 寄 付	49	0
4. その他	0	0
合 計	3,844	3,900

B) 支出の部

1. 総会開催	664	700
2. 新年会開催	690	700
3. 会報・会員名簿の作成	811	800
4. ホームページの運用	175	350
5. 会員慶弔	641	700
6. 世話人会の運営経費	273	400
7. 事務所運営経費	812	850
8. 予備費+雑費	0	100
合 計	4,066	4,600

C) 繰越金及び預り金の部

当期収支残高	- 222	- 700
前期繰越金	2,075	2,075
当期末繰越金残高	1,853	1,375

(預り金)

次年度以降年会費等	1,065	
双日次年度助成金	625	
預り金残高	1,690	
合 計	3,543	

2019年度事業計画 及び 収支予算

(期間：2019年7月1日～2020年6月30日)

ニチメン東京社友会

I. 事業計画

	千円	
	予算	前期実績
第14回 総会・懇親会開催 (2019年7月18日)	700	664
会報の発行 (年二回 会報を作成し送付いたします。)	800	811
ホームページの運用	200	175
第13回 新年会開催 (2020年1月 予定)	700	690
慶弔行事	700	641

II. 収支予算

A) 収入の部

1. 会費	1,300	1,295
2. 双日助成金	2,500	2,500
3. 寄付	0	49
4. その他	0	0
合 計	3,800	3,844

B) 支出の部

1. 総会開催	700	664
2. 新年会開催	700	690
3. 会報・会員名簿の作成	800	811
4. ホームページの運用	200	175
5. 会員慶弔	700	641
6. 世話人会の運営経費	300	273
7. 事務所運営経費	850	812
8. 予備費+雑費	50	0
合 計	4,300	4,066

C) 繰越金及び預り金の部

当期収支残高	- 500	- 222
前期繰越金	1,853	2,075
当期末繰越金残高	1,353	1,853
次年度以降年会費等	0	1,065
双日次年度助成金	0	625
預り金残高	0	1,690
合 計	1,353	3,543

◎ 会 員 動 向

新規加入者（敬称略）

阿久津佳子

退会者（敬称略）（2018年度）

高橋一枝

資格喪失者（敬称略）（会則 11条3項により、会費を2年間以上未払の場合が該当いたします。）

上野博司、奥野義男

連絡が途絶えている方（敬称略）

（連絡先をご存知の方は、事務局までお知らせ願います。）

石川勝美

新入会員募集中

皆様の周りで未加入の方がいらっしゃいましたら是非勧誘いただきたく思います。

本会の会則に同意して、会費を納入頂けるなら会員になれます。

（ニチメン、ニチメンの関連会社に在職したことのある方が対象になります。）

◎ 2019年度(2019年7月～2020年6月)年会費(3千円)入金状況とお願い

2019年9月30日現在

会員数	入金済会員	長寿会員(註1,2)	終身会員	未納会員
456	327	47	5	77

** 2018年度分未納者数	**	8
----------------	----	---

尚、来年度(2020年7月～2021年6月)年会費 納入済の方→	54	(註4)
----------------------------------	----	------

お願い：

2019年度会費を未納付の方は当年度中の納付にご協力下さい。2018年度分未納者は大至急2019年度分と合わせて 納付頂くようお願い致します。当会会則第11条の規定により2期分の会費未納者は会員資格喪失となります。振込先は、次のいずれかを利用して下さい。(振込手数料は各自ご負担願います。)

1) 郵貯銀行

口座番号 : 00100 - 4 - 318041

口座名義 : ニチメン東京社友会

(ゆうちょ銀行に口座のある方は、口座間送金を利用すると手数料は無料です。)

2) 三菱東京UFJ銀行 東京営業部

普通口座

口座番号 : 8225155

口座名義 : ニチメン東京社友会 代表 石原啓資

振込に際しましては、振込者名欄に ご自身の名前を最初に 左詰めにて 記載願います。
(ネンカイヒ、ニチメン、XXネンドカイヒ等の記載があると 振込者名が通帳
に記載されず、振込者が特定できません。)

(註1) 長寿会員は年会費免除になっておりますが、長寿会員からご送金を頂いた場合は当会へ
のご寄付とみなし処理させていただきます。(会運営上大変助かります)
但し、何らかの手違い等であれば事務所までご連絡下さい。

(註2) 長寿者氏名：(50音順 敬称略)：

青木繁行、石川勝美、市川元久、伊藤安雄、岩居宏一、内田英三、海野敏夫、大塚静子、
大西勇、大野久生、大森啓作、河西良治、上条達雄、亀田昭、川崎恵美子、木内純一、
北村俊夫、久保貞二、古藤彰三、小林齊之助、近藤貞一、桜井潤一、三分一克美、新野敬一、
杉浦幸雄、高田秀子、伊達邦雄、中谷喜良、南部晴雄、西奥薫尚、西村弘、橋爪覚、平岡昭三、
廣瀬一彦、深尾孝、福富直明、古川熙、松尾憲一、松田實、松村信男、松本忠夫、松本寿夫、
丸山泰三、三宅葉、宮田信雄、望月昌徳、吉田孝生、以上 47名

(註3) 終身会員 (50音順 敬称略)

入江隆史、岩田功、奥村睦夫、千田俊章、宮本正博 以上 5名

(註4) 2020年度(2020.7~2021.6)年会費納入済会員(50音順敬称略)：

<<来年度は、振込不要になります。再来年に、21年度分の振込をお願いいたします。>>
青木浩、赤澤宏哉、浅井正彦、浅子豊治、芦村八郎、石原啓資、今井明、宇津木長、大北克利、
岡田茂、北川敬、喜多嶋雄徳、木寺厚二、京野勉、窪田厚三、桑島有一、小松繁範、佐野進、
柴田実、新藤孝、菅沼利太郎、陶山晃、高橋卓子、田村達也、土屋秀雄、土橋勇、永井清光、
中田龍彦、永田堅志郎、中谷宣英、中原正紀、名島憲一郎、滑川和子、南部捷郎、西川周、
西村照男、野城恒男、野本定男、半林亨、蛭田恒美、細谷和夫、秀真正彦、堀江亘、牧洋生、
松村森男、松本宰子、溝江博三、宮尾迪子、村上匡一、本松巖、山岸正雄、山口一光、吉木健、
吉水稔、以上 54名

(註5) 2019年4月以降で 寄付をいただいた方々

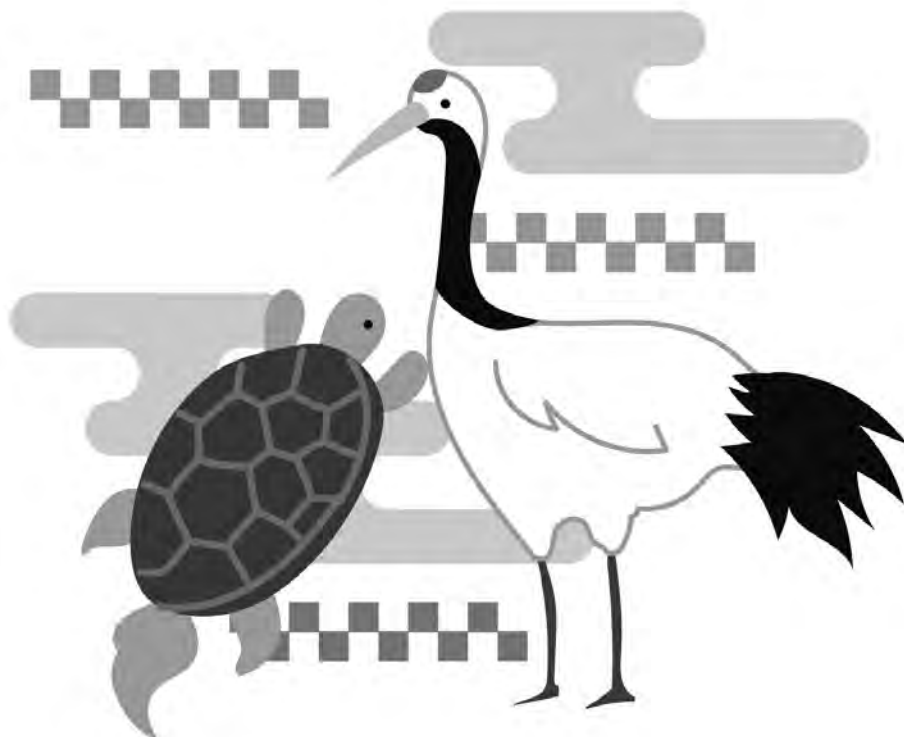
三分一克美、松村信男、木内純一、西村弘、池辺幹夫、河西良治、幾島清、松本寿夫、
大塚静子、宮浦煬子(故宮浦博御内儀)、幾島涉(故幾島清ご長男)

2020年 新年会にて 長寿者お祝い対象者(敬称略)

白寿 (1922年生まれ) 1名
石川勝美

米寿 (1933年生まれ) 9名
糸井康雄、宇治田薫、宇津木長、大久保海生、菊池省三、北川敬、高瀬裕、水庫博夫、
溝江博三

なお、大変恐縮ですが対象者の名前に漏れ等不手際があれば至急世話人会へご連絡願います。



会員寄稿文

棲み分けの進化論

山 邑 陽 一

勤務先商社（ニチメン）の本社がまだ大阪と東京にあったころ大森寮ができて、東京在住以外の社員も単身で東京に赴任でき、単身赴任手当ももらえるようになった。

丹波篠山の民謡「デカンショ節」は、今では兵庫県民謡として知られる。デカンショとは出稼ぎということである。歌にあるような、出稼ぎで半年暮らせば後の半年は寝て暮らす優雅な出稼ぎは、今は望めないが（「花のお江戸で花見する」くらいはできる）、昔は江戸の金貨と大坂の銀貨の為替（両替）がうまく利用できたのであろう。私も商社在職中の後半は東京での出稼ぎで食い繋いだ。その後の大分での教職（日本文理大学教授・2000 - 2006）でも同じである。出稼ぎ先で私はたくさんの勉強をした。東京兵庫県人会でお会いしたアサヒビールの瀬戸社長（当時）と大分の三和酒類（「下町のナポレオン」・「いいちこ」の製造者）の西会長とには種々ご教示頂いた。三和酒類については、慶應義塾出版会の『ケース・メソッド入門』（2007）に私が寄稿した小論が掲載されている。

大森寮にいて帰郷しない週末には、日帰りや一泊で近隣旅行やハイキングに出かけた。とりわけ思い出に残るのは、寮友数名と日帰りで行った箱根八里歩きで、箱根登山鉄道の終点から旧東海道を芦ノ湖畔まで歩き、笠富士を後に見ながら三島行バスの終点まで歩いて下山し、夜遅く大森寮に帰った。またある休日には、名古屋から大森寮に来ていた寮友の誘いで、午後の半日を一緒に寮近辺を散歩した。散歩の間じゅう、彼は私がそれまで知らなかった今西錦司という人が発見した「棲み分けの進化論」について詳しく話してくれた。ダーウィンの進化論の「環境に適合した種が生き残る」という結論に加え、自然淘汰の結果、環境に適

合した一つの種が生き残る種として選択されるまでには、種どうしの間での長期に亘る「棲み分け」があるという（「強い種が生き残る」というのは、米国人が好んで用いるフェイク・セオリーであり、米国は今や氷河期時代の恐竜と同様に環境不適合種となった）。今西さんは著書『進化とはなにか』（講談社学術文庫1、1976）の中で人間社会の進化論にまで言及しているが、私なりに今西進化論を人間社会に応用してみた。

いま世界では、全体主義・自由主義・民主主義・民主主義の退化形態（新自由主義＝民主主義－平等－博愛）などさまざまな政治体制の国家・民族が棲み分けながら、生き残りの道を模索している。そんな中で過剰な政治の介入を許さない自由で公平な商業活動が、国内・国際の平等・博愛をもたらす。各国ごとに違う生存環境に適応する能力のある商品を多量に供給できるからである。平和な戦後の総合商社9-10社時代に、9 - 10社が業界内で棲み分けながら、日本と他の多くの国の生き残りに貢献した。政治を利用したり浮き利を追って世間から批判されたりした経営者たちは淘汰され、総合商社の数も減った。しかし多くの専門商社がこれを補って活躍している。今でも日本の自動車業界などでは、数社が棲み分けて競いつつ、各国の環境に適応した生存競争に強い商品を供給し続けている。

少数企業による国内・国際の寡占・独占は、棲み分けによる環境適合競争の機会を奪い人類の滅亡につながる。戦争はもっとも短期かつ直接的に人類を滅亡させる。共存共栄の平和な棲み分けを持続すること、これだけが人類の生存を永続させる。今西進化論は、このことを私たちに教えてくれると思う。（2019.8.15、対外経済貿易大学大学院特坐教授）

会員寄稿文

無 常 に つ い て

……ゲーテと道元、そして道長など……

竹 内 可 能

あっという間もなく傘寿も過ぎ去ってみると、御多聞にもれずこのわたしにも体のそこここに、とりわけ目や耳や足腰にわけもなく忍び寄る不具合が感じられる今日この頃である。いよいよわが身にも“無常迅速”を覚えるとともに、そぞろ人生の総括の必要を感じないわけにはゆかない。そんなわけで先般来、本誌でも取り上げていただいたソクラテスやゲーテも、先ずはこれら西欧文明の先駆者たる巨人たちが、人生の最期をどのように迎えたのか知りたくて挑戦してみたかったからともいえようか。

ゲーテの「ファウスト」と無常について

しかしこうして読みあさってきたソクラテスやゲーテ最期の物語だが、実はわたしにはもう一つの動機があった。それは私自身がこのごろ急に意識するようになってきた人生の「無常」について、ソクラテスとはかくとして、ゲーテがどのように考えていたのかを知りたくなったのである。

ところが紀元前5世紀という昔のソクラテスについてなら、彼一流の流儀をもってすればさもありなんとは思える。だが18～19世紀にかけて知の巨人といわれてきたゲーテについていえば、最晩年畢生の遺作「ファウスト」の中で、ゲーテ半身の身代わりともいえる悪魔メフィストフェレスが、あれだけ“否定”と“虚無”そして人生の“諦観”についてなら、全篇にわたって執拗に語り続けているにもかかわらず、わたしはこの詩曲の最後の一行に至るまで、日本人が考える「無常」の思想や無常感の響きを感じ取ることはできなかったのである。正直なところこれはわたしにとって意外で

あった。

実は本誌の何号だったか“先輩の三分一さんに捧ぐ”という副題のもとにゲーテに関する一文を投稿したが、わたしは同氏からいただいた上下二巻からなる大部の解説書に従って、新約聖書（キリスト教）から見た「ファウスト」をあらためて読みかえしていた。そしてこの自家出版による研究書（著者は森田邦雄という聖書にめっぽう造詣の深い無名の研究者（故人）で、その昔三分一さんのご近所の住人だったという）によって大変貴重な知識を得ることができた。この研究書のお蔭でわたしは「ファウスト」なる難解至極な文学作品を、まがりなりにも理解することができたという秘かな至福を感じてはいたのである。

この書によってわたしがあらためて知り得たのは、「ファウスト」なるゲーテ畢生の大作は、世界にその名をとどろかせた大文豪ゲーテが、主に新約聖書のヨハネ福音書が説き明かすキリスト教信仰の上に立ちながら、これをなぞるようにして、自身の全生涯にわたる体験と思想（宇宙感や人間感）のありったけを、地上世界における映像（詩曲）にして描き綴ったものであるということだった。「ファウスト」が世にいうドイツ語の Weltbibel（聖書の世界）とは、まさにこのことを言っていたのである。

それだけにまたわたしは、ゲーテが「ファウスト」の中でくりだすキリスト教的な思想には、日本人になじみの深い「無常」と、もしかしてなんらかの共通点があるのではないかと、秘かに期待していたものでもあった。予てわたしは法然とか親鸞におけ

る浄土教が、ある意味で西洋のキリスト教に類似点を見出すことができる、といった議論を耳にしていたからである。だからその期待がはずれてしまったことに多少の落胆は隠せなかったのだ。

第二には、先のWeltbibelに関連して、ゲーテが「ファウスト」第二部最終章で織りなす物語によって、読者はファウスト（ゲーテ自身）の人生終局のテーマが、とどのつまり、主キリストによる「救済」であったことを知るが、これも正直に申せばわたしには落胆であった。

主人公ファウストの最期といえ、盲目となり、死して老い朽ちた亡骸を墓穴にさらすとき、彼の靈魂は、これをメフィストフェレスの指図する悪魔の群れと、天使たちが奪い合う。が、最後は晴れて“不滅の魂”となり天使たちに導かれて昇天する。その最期は栄光の聖母マリアの見守るなか、大勢の天使や隠士、それにグレーテヒェン（ゲーテ初恋の人）をはじめとする“贖の女性たち”など、盛り沢山の祝福の言葉と合唱のうちに荘厳される。

以上を読み終えたとき、わたしの脳裏をかすめたのは他でもない、あの藤原道長の最期を記す「栄花物語」のこんな一節であった。曰く（意識）「道長は立てまわした屏風の西側を開けて、九体の阿弥陀仏に面し、北枕に臥した。これは釈尊入滅の姿勢である。そして手には阿弥陀仏から引いた糸を取り、ひたすら仏をあおぎ、念仏をとこなえるのみであった。堂の内外では不断念仏がおこなわれ、瞬時も休まず念仏の音がひびく。……」

こんな面白くもない彼我の臨終の対比をもちだしたのは、古今東西、人間の「死」に際しての儀式なんてものは、宗教の如何にかかわらず、どこもかしこも似たり寄ったりであることを示しておきたかったからである。

以上わたしが「ファウスト」に係る感懐をあらためて書き纏めてみたのは、他でもない、先に述べた「無常」について考え直して見たかったからである。「ファウスト」の詩曲の最後の一行にまで、ゲーテは「無常」について何も書き込んでいない、とわたしは断言した。無常についてなら学生時代から思うところはあったし自信がないというわけではなかったが、わたしはこの際自分自身をもう一度確かめたい気分もてつだって、もう少し「無常」について勉強し直してみることにした。

唐木順三と『無常』

手っ取り早くという意味で、その昔読みかじった唐木順三の著作になる『無常』を、書架からひっぱり出してきたものだ。この書は無常に関する限りわたしのお気に入りだったからである。それにこの著者がよく引き合いに出してくる兼好法師の「徒然草」や鴨長明の「方丈記」、それに道元禅師の「正法眼蔵」など、偶々書架に飾り物のようにしまいこんでおいたものを、埃を払いながら机の上に持ち出してきてみた。これらの著作によって唐木順三の説く「無常」を、いちいちこの目で確かめて見たかったからでもある。

どれもこれも今回読み通したというわけではないが、今さらに感銘をうけたのはやはり唐木順三によるわが国での「無常」の歴史と解説だった。下記にわたしが引用させてもらおうとしているのは、嘗てこの種研究で有名をはせた著者による『無常』のなかの珠玉のような名文の一下りである。これぞまさしく今わたしが解き明かそうとしている、われわれ日本人の無常感と無常観について余すところなく書き尽くされている。少しく長くなるがお付き合い願いたい。

いわく、「無常を語る場合、きはだって雄弁になり、それを書く場合、特に美文調に

なるといふ傾向がきはめて顕著であるといふことが、日本人のひとつの特色といつてよいだろう。無常が死とのつながりをもって考へられるとき、それは人生における異常なことである。異常なことの表現が美文調や雄弁となることは異常のことではない。恋愛もまた一種の異常体験だから、それが古来の詩歌、物語の題材ともなり、また人に表現せずにはいられないほどの衝撃を与へたのもあろう。死や恋愛を表現することにおいて通常とは違ふ一種の興奮を伴ふことも、従って日本人だけではないであろう。旧約聖書の「雅歌」、中国の「詩経」等にも探せばそれを證するいくたの類例を拾ひうるであろう。

さういふことを頭において考へても、日本人が無常を語る場合、美文調になるといふ特色は、依然として顕著であると思つている。

『いろはにほへど、ちりぬるを、わがよたれぞ、つねならむ』云々は、『涅槃経』の『諸行無常 是生滅法 生滅滅已 寂滅為樂』の日本語訳だとつたえられている。さういふ無常の根本義を、おのが国語のアルファベットとした民族は世界に類例がないだろう。かういふことは単に偶然ではない。日本人の心情の奥に、諸行無常と共感するものがあればこそ、それが長い間、国語のアルファベットとして通用してきたのであろう。別な方面から考へれば、諸行無常を、世界観や哲学として受け取らずに、情緒的に、人生経験的に、せいぜい

人生智として受け取り、それをそれとして感じてきたといふことにもなろう。祇園精舎の鐘の音に、諸行無常を感じ取るといったやうな受け取り方である。それだけにまた国民一般の間に、ひろくこの無常観が、無常感覚としてしみ透っていたということにもなろう。言つてしまえば、日本人は無常を、無常世界観、無常観として考へる以前に、無常感としてまず共感し、その共感を、仏教の語彙をかりて表現するとい

ふ傾向が著しい。……」

以上が唐木順三による、日本国民の「無常」論からの一部引用であるが、言いえて妙なところ敬服を覚える。西行も鴨長明も兼好法師も、そして芭蕉にいたるまで、或いは恵心、法然、親鸞、一遍そして道元にいたるまで、この著者の俎上の人となつて日本人の「無常」を切り刻んで見せたものだ。

さてその「無常」である。唐木は上述の引用文の最後の部分で、日本人は無常について、世界観とか哲学といった思想的（形而上学的）な観念によらずして、情緒的、人生経験的（現実的）に受け止め、先ずは無常感というようなものを共感し、その共感を、仏教の語彙をかりて表現する傾向を語っている。

道元とハイデッカーの「原存在」

しかしここに日本の思想史上これに対して異を唱える思想家がいたことは注目値する。それは誰あろう道元禅師（西暦1,000～1,253）その人であった。

今となつてはどこの誰であったか、たしか高名な学者先生の発言だったと記憶するのだが、かつて日本の思想界で真の哲学者がいたとすれば、それは道元を措いて他にはいない、という意味の言説を読んだことが思い起こされる。つまり「無常」についても道元の思想は実に冷徹で、かつは形而上学的であった。同時代の法然や親鸞が宗教を旨としたのとは違って、道元の説く「法」（「正法眼蔵」）は著しく哲学的であったところに特徴がある。

彼はよく口を極めて「無常迅速」という言葉を吐いたといわれるが、早い話が、彼の言う「無常」の思想も、根本義をいえば彼独特の「時間」の哲学から発しているように思はれる。道元の時間の哲学として有名なものに、松には松の時、竹には竹の時がある、という言葉がある。いわく、「松も

時なり、竹も時なり。時は飛来するとのみ解会すべからず云々」と。同じように彼は「正法眼蔵」の中でいう「無常」も、例えば「……一日一夜をふるあひだに、64億9万9千百八十の刹那あり、五蘊ともに生滅す。……」といった「刹那生滅・生起」説がその基本にある。

道元独特の「時間」に関する「有時（うじ）」の哲学だが、「時は有なり」という（仏教では「有る」という言葉自体が「存在」を想起させるという）、現代のハイデッカーにも通じる実存哲学のはじまりかと思はせるのがそれである。ドイツ語にいうDasein、つまりはハイデッカーの説く「原存在」は、かれの世にも有名な著作「存在と時間」に代表される哲学の核心である。このわたしを驚かせて止まないのは、なんと西洋における実存哲学の嚆矢ともいえよう哲学者より700年以上も遡るその昔、わが道元禅師が、既にこの西洋の哲学者同然の、存在と時間についてきめ細かい思索を書き綴っていたことである（「正法眼蔵」）。

考えて見れば、ハイデッカーの「原存在」も、道元の「有時」（うじ）の哲学も、存在することを了解し、存在の意味について問う、人間独自の在り方を究明しようとした。「原存在」について言えば、人間は世界の内部の様々な存在者（存在する事物のこと：仏教の言葉に置き換えるとすれば「万法」か）の一つにとどまらず、常に存在全般についての関心（配慮）をいだいている者とした。ハイデッカーはそのような「存在とは何か」を問う存在の問いを常にいだき、存在へと関わる人間の際立った在り方を、単に存在するだけの事物と区別して、これを「原存在」と呼んだのであった。

道元の哲学が偉大であることの証左は、その著作「正法眼蔵」の中の「有時」に記されているように、いわば「原存在こそが時間である」とする（道元は「原存在」という言葉こそ知るよしもなかったろうが）、正に主体的時間の発想であり、そこから引

き出される、「松も時なり、竹も時なり」とするかれ独特の時間の哲学だったように思える。

近代西洋哲学の系譜をたどれば、有名な「われ思うゆえにわれあり」のデカルトにはじまり、現代のハイデッカーの実存哲学に繋がるとされる。そのハイデッカーをさしおいて、わが道元禅師が13世紀にもさかのぼるその昔、いわば「われ思うゆえに時有り」ともいうべき主体的時間論（有時論）を展開していたことは、返すがえす驚嘆にあたいするのである。

道元の無常について

古来日本人の無常感の奥深いところには、「生滅滅已」即ち生滅経過の果てが「時間」の終局であり、それが「死」であるとする観念がある。従って道元のいう「無常迅速」も、民衆にとってみれば、無常の「死」がたちまち到来する着地点、という意味に受け止められたとしても不思議はない。事実、道元自身にも「一期は夢のごとし、光陰は早く移る。露の命も消え易し、時は人を待たず」というような感傷の言葉がある。高貴だが複雑といわれる出自からして、かれの道心や菩提心の出発点もまた、ありふれた「無常感」だったことはいかたがえ。

しかしかれのいう「無常」には厳しいものがあつた。この後でも触れるように、かれは持論の「生死即涅槃」のなかで、「無常は生死の先にあるのではない。無常こそが涅槃であり、生死である」というのである。無常変転そして生滅無常が「時間」そのものでもあるからには、それは無限の反復を繰り返すのみで、それ自体無目的で非連続的なものだ。従って人間にとって、「死」や「虚無」も「無常」の経過点であることに変わりはないと考える。こうした道元の「無常」の哲学は、当時の思想界の本流とも思える浄土教の教義からすると際立って異質だったにちがいない。

唐木順三がその著『無常』で喝破したよ

うに、「無常」は当時の日本人がそれぞれに共感した己の無常感を、仏教の語彙をかりて表現したものだという。けだし名言である。その傳で申せば、道元が考えた「無常」は、彼の冷徹な「時間」の哲学を仏教の言葉をかりて表現したものといえるのではなからうか。これを要すれば、当時の日本人が感じた平均的な無常感から、情緒とか感傷を差し引いたものと考えてもよからうかと思える。

もう少し道元を語りたい。

上述の彼独特の「生死即涅槃」説についてである。彼は言う、「生死はすなはち涅槃なりと覚了すべし。いまだ生死の外に涅槃を談ずることなし」と。意識してみるまでもなく「生きるの死ぬのが現世としても、言ってみれば、これが悟りの現象世界だということ」にちがいない。これぞ当時13世紀にしては恐るべき冷徹な哲学ではないか。もっともこれも道元の「無常」(時間)の哲学からすれば当然の帰着点かもしれない。実に「生死即涅槃」なるテーマは、現代人にとっても興味のあるテーマと思われるが、論議は別段の機会にゆずるとしたい。

ここではもう一つの道元の思想を考えて見たい。

つくづく思うに、道元という人物は、読めばよむほどに、西洋哲学の祖たるソクラテスや、知の巨人たるゲーテにも匹敵できそうなわが国の思想家ではないかと思える。そのもう一つの注目すべき思想とは、古今東西の歴史的なテーマ、“肉体と靈魂”についてのものだ。道元は彼の著す「正法眼蔵」の中の「弁道話」という説話の一つとして、仏法にいう“心身一如”、“性相不二”を説いている。

つまり彼の弟子たちとの問答のなかで、俗にいう身体は「生滅」するが心性は「常住」するかとの問いに対して、道元の答えは苛烈である。「右の如き説は外道の見であって、まことに瓦礫をにぎりて金宝と思はんよりもなほおろかなこと、狂人のひび

きにすぎず……」と云って、身体(肉体)と精神(靈魂)は不可分なること、つまりは「靈魂の不滅」などは、とんでもない妄念であることをはっきりと示唆しているのである。

「靈魂の不滅」こそは、あのギリシャの哲人ソクラテスが、アテネの法廷から宣告された理不尽な死刑にたいして、獄中自ら毒をくらって死に向かうときの信念そのものであったことが思い起こされる。その彼が最期まで信じたのは、彼よりも100年ほどさかのぼる紀元前6世紀ごろ活躍の数学者ピタゴラス(宗教家でもあった)が提唱した靈魂の数理哲学だったとされる。

再び日本人の無常について

道元の思想にかまけて少し長くなってしまった。わたしがこれほどにも道元に前のめりになっていたのは他にもない、西洋にそびえたつ先述来のあの知の巨人たち、ソクラテスやゲーテに拮抗できる日本人というなら、道元禅師を担ぎ出すしかあるまい。そう考えなかったといえはウソになろうが、そればかりではない。ソクラテスはさて置くにしても、ゲーテのWeltbibel(聖書の世界)とまで言われてきた「ファウスト」の中に、「無常」とおぼしき思想のかけらもない、というのは一体なぜなのか、古来日本人がこれほどまでコミットしてきた感覚はない、といっても過言ではない「無常」に対してである。

たしかに、唐木順三が指摘するように、日本人どうしがお互い強く共感を覚えてきた無常感は、これを自分たちの哲学として深化することができずに、ただ情緒的に受け入れるほかなかったのかもしれない。しかし、たとえそうであったにしても、もしも西洋(キリスト教)文明ならば、このような無常感に共鳴するところがあるかぎり、この感覚を哲学的(形而上学的)に進展させることなど容易だったのではなからうか。それがそうはならなかったのは、そこには

日本人のような無常感そのものを受容する感覚が、皆無だったことがうかがわれる。

こうした見方に異論を唱える者はいるだろう。早い話が、近代西洋哲学界の虚無派、ショウペンハウエルに代表されるニヒリズム（虚無主義）だ。なるほど、日本人の「諸行無常」や「是生滅」といった無常感の共感のなかには、情緒とか感傷と隣り合わせの「死」があったことはたしかだ。しかしそれは本来「虚無」（ニヒリズム）とは似て非なるものである。生きるためなら日本の民衆はしぶとかったといえるのではないか。彼らは道元とは違った意味で、情緒や感傷にほだされることなく冷酷で現実的だった。ニヒリズムは学者や詩人のものだったにしても、一般の民衆とは無縁のものだったろう。

繰り返すようだが「ファウスト」のなかには無常も無常感も見られなかった。ゲーテ畢生の遺作に「悲劇」とまで冠して世に問うた「ファウスト」なのである。しかしよくよく考えて見れば、われわれ日本人がいうところの「無常」や「無常感」は、始原的に見れば、人間の“生・老・病・死”にかかわるネガティブな仏教思想だったり感情だったはずである。ところがゲーテに於いては、日本人が見立てるように“生老病死”を「苦」の根源とは考えていないことが知れる。なるほど彼の全生涯を見渡していえることは、彼ほど「生」（人生）を勢いよく駆け抜けた人はめずらしい、とさえ思える。彼は恋愛も文学も学問も、人生そのものを、自らもよく語った“エンテレフィー”（生命力）のかたまりのように生きた。だからゲーテの人生には、その最期まで「生」はあっても、“老病死”は現実のものではなかったのではないか。

西洋キリスト教文明社会にあっては、神への絶対的な信仰が渴望されてきた。それは彼らの絶対神こそ万物の創造主であり、

神の子たるイエス・キリストは人類の救世主だからであった。そして神と人間は、約束の関係（新約聖書）にあったから、約束を果たしえない宿命の人間にとって、その罪は原罪とされてきた。それゆえ、原罪の償い（救済）は神への篤い信仰による他はない。

ところが古来日本の浄土教的社会においては、上記のような絶対神が存在したわけでもなければ、まして神との約束事があるはずもなく、原罪などは想定外のことだった。民衆はただただ阿弥陀仏にすがって「救済」を求め、弥陀はその本願をもって民衆の“厭離穢土”“欣求浄土”に答えようとしていたのである。しかし、どれほど称名を唱え、どれほど座禅を組んだところで、衆生が「救済」される保証がどれほどあったのであろうか、畢竟するに、衆生はやはり心のどこかで人生の不安を隠せなかったのではないか。わたしはそこに日本人の「無常感」がふつふつとして漂う風景を想うかべている。

（おわり）



会員寄稿文

中国で美味しい麺

中 田 龍 彦

中国とのお付き合いも今年で39年になる。初訪中は1980年の8月末である。ニチメンからの企業派遣で北京語言学院（＝現 北京語言大学）という外国語教育を行う大学で現代中国語を学ぶためニチメンの同僚3人と一緒に1980年9月～6月まで1年弱留学した。当時は日中間の直行便のフライトは、成田⇄北京、上海にしかなかったと記憶している。航空会社も日本はJAL、中国はCAAC（＝中国民航、現在は何社かに分社化された）の2社しかなかった。飛行機が北京空港に近づくと地上に見えるのは農地と防風林と未舗装の道路ばかりで、偶に馬車（実は後でロバが引いているロバ車と判明）がこのこと移動しているのが見えた。飛行機が北京空港に到着すると、下り乗り用のタラップがつけられ、飛行機のドアが開いて最初に入ってきたのは、銃剣を背負った人民解放軍の兵士だった。これはドエライ所に足を踏み入れてしまったなど直感した。

北京語言学院は外国語を学ぶ中国の学生の他、中国の改革開放政策に沿って、海外から外国人留学生を数多く受け入れるようになり、国籍も様々だった。大学には中国人学生用・留学生用・モスリム用（中国語では“清真”という）の3つの食堂があった。留学生はもっぱら留学生用の食堂で朝昼晩の3回の食事を取る。欧米系の学生も多かったので、食事は中華風のウェスタンもどきだった。食事の度に宿舎の部屋から白塗りのホウロウでできたボールを2個抱えて食堂に行き、そこで事前に中国元と交換をしていた食事券（5元、1元、0.5元、0.1元だったと記憶）と引き換えに料理やご

飯・パン等をボールに盛ってもらいテーブルで食べるスタイルだった。何ヵ月か経つと、留学生食堂の味に飽きて、友達になった中国人の学生の誘いもあり、中国人用食堂で食事を取るようになった。中国人食堂のテーブルの上にはインゲンなどの調理前の野菜が置いてあり、学生が食事の傍らでインゲンのヘタやツルを自発的に取るようなシステムだった。また食堂の給仕係も中国人学生の交代制で、知っている中国人学生が給仕当番だとオカズを大盛にしてくれたりした。

然しながら、中国人食堂の料理も油が多く使用されており、日本人にとってはまた中華かと閉口するようになる。そこで、同僚3名と一緒に北京友誼商店で冷蔵庫を買い込んで、南京錠をつけて宿舎の廊下に設置、大学の近くの市場で野菜を買ったり、北京友誼商店で生肉（勿論、豚肉と鶏肉が主流）や卵を買ってきて、宿舎の部屋に電熱器にフライパンを掛けて和食もどきを作ってよく食べた。この自炊のお陰でチャーハンの腕前が上がり、我が家ではチャーハンを作る時は私が料理当番である。



2018年5月現在の北京語言大学の大学校舎 古い校舎は取り壊され近代的な校舎に立替られていた



2018年5月現在の北京語言大学の大学宿舎
雰囲気は昔のままだが寄宿舎の各部屋はリニューアルされている。

当時は殆ど自家用車などはなかった。バスと自転車が移動の基本だった。



2018年5月現在の北京語言大学の大学宿舎 10
号楼（筆者が寄宿していた建物）の331号室（写
真矢印）を外から見上げた写真。331号室の真下
がボイラー室で冬場は騒音と煤煙がひどかった。
窓はガラス入り木枠の二重構造だったが、気密性
が低いため、部屋の内側から木枠の隙間に紙を
切って目張りしていた。現在は窓はアルミサッ
シに交換されており、各部屋にエアコンも完備さ
れている。

話が留学時代にフォーカスしてしまった

が、今日の話は中国の美味しい麺の話である。

留学を含め5回に分け、北京（留学1年）→上海（駐在5年）→北京（駐在5年）→北京（駐在2年）→大連（駐在3年）と合計16年間中国で生活した。この間に数多くの中国国内出張や旅行を経験した。中国には直轄市・省・自治区・特別行政区を合わせ34の一級行政区があるが、行ったことがないのは南から北に順に海南島・チベット・青海・江西の4つだけである。

2013年7月中国商務部と中国飯店協会により第2回中国飯店文化節及び第1回中国面条文化節で初めて「中国十大名面条（中国十大麵）」が選出され、武漢熱乾麵、北京炸醬麵（北京ジャージャー麵）、山西刀削麵、河南蕭記燴麵、蘭州拉麵（蘭州ラーメン）、杭州片兒川、崑山奥灶麵、鎮江鍋蓋麵、四川担担麵（四川タンタン麵）、吉林延吉冷麵が中国10大麵に選ばれた。小生が中国各地で食べた麵で美味しかったものを以下3つ紹介する。以下はいずれも中国10大麵にランクインしているのは興味深い。

●蘇州 奥竈麵（アオジャオ麵、中国語：奥灶面）

蘇州は中国で最も河と橋が多い街。運河が栄えた姿は「東洋の水の都」と言われている。観光地としても有名で、張継の詩楓橋夜泊（月落ち烏啼いて 霜天に満つ 江楓漁火 愁眠に対す 姑蘇城外 寒山寺 夜半の鐘声 客船に到る）の舞台となった寒山寺を始め、沢山の庭園が存在、拙政園、留園など9つの古典庭園がユネスコ世界遺産に登録されている。

また上海から高速鉄道で約25分、約100kmの近さで非常に立地的優位性を持っている。

蘇州麵（日本の昔風ラーメンに近い）は有名で、基本は鶏がらスープ。白湯もあるが、醤油を加えたスープ（紅湯）もある、

麺は細麺が基本。一方、仕事で蘇州で偶々泊まったホテルの朝食に出たのが奥竈麺（アオジャオ麺）で、これは非常に珍しいラーメン。元々は江蘇省昆山市の漢族の伝統麺で、発生は蘇州ではなく昆山と言われている。青魚という魚からダシをとった濃厚スープが特徴で、トッピングは好みで載せる。見た目、スープの色は真っ黒に近い（下記写真参照）。蘇州麺と違って味は濃目。麺に油っぽいスープがからんで実に旨い。蘇州に行くチャンスがあれば是非トライして頂きたい。



出所：百度（写真はイメージ）

●蘭州 牛肉麺（ニューロウ麺、中国語：牛肉面）

蘭州はシルクロードの入り口の町である。市域は海拔1,600m、市内を黄河が東西に流れる。市街地は黄河に沿って20kmに渡って細長く延び、黄河には12の橋がかけられている。

蘭州は漢族に次いで回族が多く、他にもドンシャン族、ユグル族、サラル族など白い帽子を被ったイスラム系住民が多い。古くからシルクロードの要衝で、秦の昭王の時代に隴西郡の地となり、漢代に金城郡が設置された。このため金城が蘭州の古名となった。隋代の582年、蘭州が設置されて現在の名称になった。清代に甘肅布政使が駐在した。中華人民共和国成立後、元南満州鉄道の日本人技術者とソ連の援助によって、宝鷄からの鉄道が開通した。

甘肅省蘭州で食べた牛肉麺も忘れられない。名前の通り牛肉が麺の上に置かれている。またスープはパクチー（香菜）とラー油が効き非常に旨い。蘭州牛肉麺は毎日新聞で以下紹介されている。中国西北部・甘肅省蘭州の郷土料理「蘭州牛肉麺」が日本で広がりを見せている。牛骨と薬膳スパイスのスープに手打ち麺が特徴で、中国では約3万5000店が展開するとされる「庶民の味」。また2019年4月8日（月）にカップヌードルからまたまた変わり種の商品が発売された。それが…「カップヌードル 蘭州牛肉麺（税込184円）。日本で手短かに手に入るのでご興味のある方はこれを是非お試し下さい。



出所：昵图网（写真はイメージ）

●成都 タンタン麺（中国語：担々面）

成都是「魏・呉・蜀」の三国志の時代から蜀の都として知られ、四川省の省都として、中国西南の政治、経済、文化の中心地となっている。漢方薬材の集散地であり、「天府の国」といわれる豊かな風土に生まれ、スパイスたっぷりの四川料理が人々の元気の素だ。劉備玄德と諸葛孔明ゆかりの武侯祠や、詩人・杜甫が詩を作りながら暮らした杜甫草堂など、みどころが市内と郊外に多数点在している。また、中国で最も茶館の多い街でもある。

成都にある古くからある有名ホテルは錦江賓館である。この中二階のレストランで

食べたタンタン麺（担々面）の味は辛さの中にうまみが閉じ込められていて、忘れられない味である。「担担」または「担担兒」は成都方言で天秤棒を意味し、元来、天秤棒に道具をぶら提げ、担いで売り歩いた麺料理のためにこの名が付いたと言われている。本場の中国四川省では、日本で言うところの「汁なしタンタン麺」が食べられている。もともと、天秤棒を担いで売り歩いていた料理であり、スープを大量に持ち歩くのは困難であったことから、「汁なし」が原型であるが、汁の入ったタンタン麺もある。麺は一般的にストレートの細麺で、鹹水は使わないので色は白い。四川風の花椒（華北山椒）（山椒の同属異種）とラー油の風味を利かせた醤油系の少なめのたれに、ゆで麺を入れ、「脆臊」（ツイサオ 拼音: cuìsào）と呼ばれる豚肉のそぼろとネギ、ザーサイなどを載せたスタイルのものが一般的である。タンタン麺を食べている時は非常に辛い、食べ終わった後の爽快感がなんとも言えな

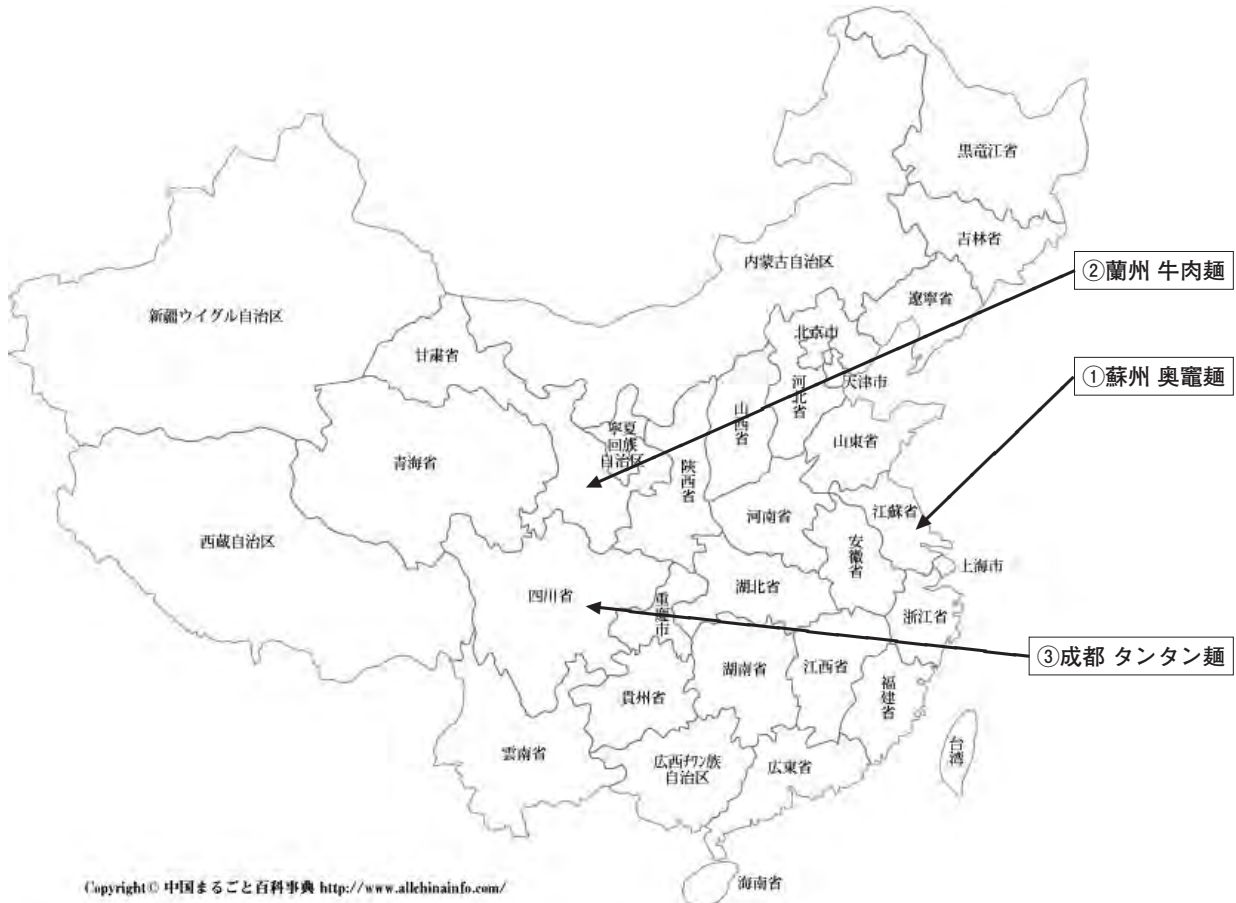
い。最近日本でもタンタン麺の人気が高まりファン増えており、成都のタンタン麺に負けない店が出てきている。辛いものが好きな小生にとっては幸せなことである。



出所：百度（写真はイメージ）

以上マイチョイスの中国の麺を紹介したが、これよりももっと美味しい麺があるかもしれない。

仕事・旅行等で訪中するチャンスがあれば、是非新しい麺に挑戦して頂きたい。



Copyright © 中国まるごと百科事典 <http://www.allchinainfo.com/>

出所：中国まるごと百科事典の中国白地図に筆者加筆

会員寄稿文

「超人図鑑」誕生秘話

芳賀 信 明

家庭内の話で恐れ入ります。

私の次男は、学研プラスで辞典編集室長を任されておりましたが、「スターウオーズ英和辞典」全3巻などのヒットを通じて、辞典部門の営業成績も上がったため、その手腕を見込まれて数年前から「図鑑」編集室長も兼任することになりました。

別に二つの部門を兼任したからと言って、給料が上がるわけでもなし、忙しさが倍になっただけです。

ところで、息子はアメリカから帰国したころから集英社の漫画雑誌「少年ジャンプ」のとりことなり、当時連載されていた「キン肉マン」という漫画の超人キャラクター募集に応募して、ジャンクマンなる超人を漫画で採用してもらうようになりました。小学6年生のころには、ついに友人と二人で少年ジャンプの編集室を訪問、それまでは漫画家志望だったのを切り替えて、編集という仕事に興味を持つようになりました。

時は経て息子は、大学を卒業して集英社ならぬ学研に就職が決まりました。

配属されたのが、50代のおじさんばかりいる「辞典編集部」。学研に入社して、なにかスポーツ雑誌の編集者となり、海外の一流選手とのインタビューをものにしたいと考えていた彼は、辞典編集部というのがどんなに地味で将来性のない部門かと、見るも哀れに落ち込んでいました。

三浦しおんの「舟を編む」という小説か映画をご覧になった方は、ご存知と思いますが、出版社の中でも辞典編集部というのは発展性のない骨董品みたいな部門で、息子も私に映画のビデオをプレゼントしてく

れて、実態も映画そっくりだから見ておいてくれと言っておりました。

しかし、息子は創意工夫して、英和辞典の表紙にディズニーキャラクターを使用したりスターウオーズのキャラクターを採用したりして辞書を単なる勉強道具からファッションアイテムに変身させ、徐々に赤字解消、ついにはアメリカの、ルーカスフィルムまで出張して「スターウオーズ英和辞典」の出版許可を取ってきました。

不良在庫を抱えて万年赤字部門だった辞典編集部もついにコンスタントに黒字を出す部門になりました。

このころは、すでに知人を介して「キン肉マン」の作者「ゆでたまご先生」との知遇を得ていた息子は「スターウオーズ英和辞典」をゆでたまご先生にプレゼントしたところ、凄く気に入られて先生から、キン肉マンに登場する超人たちについても同じような辞典を作ってくれないかとの依頼がありました。ちなみに「ゆでたまご」は原作者の嶋田隆司先生の筆名です。

キン肉マンは「スターウオーズ」と違って日本の漫画なので「辞典化」は無理と考えた息子は、超人たちを一堂に集めた図鑑にすることを提案、原作者先生の許可を得ました。

学研プラスの公式ブログにも出ておりますが、「キン肉マン」が「週刊少年ジャンプ」に連載開始されたのが、1979年、今年2019年で丁度40年になります。同時に学研の図鑑も来年で創刊50年になるので、この両者のコラボにより「学研の図鑑 キン肉マン「超人」」なるものを目指して編集に取り掛かりました。

キン肉マンは連載開始から、今日まで延々と続いており、そのこの登場する超人たちも数知れず、その中から特に人気のある超人たちを厳選して700体に絞り込みました。これら超人を、一般の図鑑と同じように「魚類の仲間」「哺乳類の仲間」「乗り物の仲間」というように35種類に絞り込み掲載することにしました。

また、オリジナルのコミックでは線画だった超人たちを、顔の表情から筋肉、物質感までもリアルに描き彩色するために、15人のイラストレーターを揃え、息子が700体それぞれに対して最終イメージを指示し、15人のイラストレーターが最終イメージが統一されるようにしました。こうして出来上がった超人たちを最終的には原作者の承認を得て図鑑に取り込みます。

こうして出版準備の整ったキン肉マンは、販売活動開始後すぐに、アマゾンの予約段階で申込数3万部を超えて、図鑑ながら一般書を凌駕して予約部数一位に躍り出ました。

4月20付けの読売新聞では写真入りで「超人図鑑」人気スパークとの題名の元、『『漫画キン肉マン』の連載開始から40年に合わせ、作品に登場する約700体の『超人』

解説した図鑑が、来月の発売を前に中高年ファンの注目を集めている。通販サイトに予約が殺到し、初回の刷り部数を急きょ増やす事態になっている。」などと詳報されました。こうして市場調査結果、40代のオールドファンを中心に需要が沸騰すると読んで初版数は図鑑の常識を破る10万部と決定しました。

こうなってくると、朝日新聞も6月23日の文化・文芸欄で「恐竜」「動物」などでおなじみの学研の図鑑では体裁は其のままに、マンガ「キン肉マン」のキャラクターを図鑑にした。作品が大ヒットしたころに子供だった30代～40代の男性を中心に人気を集めている。5月の発売前に予約が殺到、それを受けて同社の通常の図鑑の4倍近い10万部を発行した。と報じられました。

集英社の「週刊プレーボーイ」6月3日号では、「祝！昭和、平成、令和を駆け抜け連載40周年 キン肉マン総力祭り」を発行、その記事の中に、集英社と学研という会社の垣根を越えて大見出しで次のように唱っています。

図鑑として異例の初版10万部！
「学研の図鑑 キン肉マン「超人」」の制



晩泊るホテルまでタクシーに乗った。通関・タクシー・ホテルまでの間、ブラジルで習ったポルトガル語がそのまま役に立った。まだブラジルの国内を旅しているような気分だった。そのとき詠んだのが次の歌である。

「リスボンの町に降り立ちブラジルの母国のことば聞けばなつかし」。

ブラジル人が母国であるポルトガルに帰った時に感じるような気分になった。



リスボンの水道橋



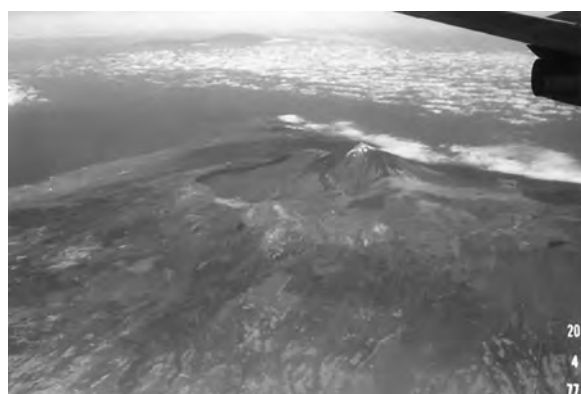
リスボンの砲台



リスボンの公園

朝のうちにジェロニモス修道院・ベレンの塔など歴史地区を見て回り、午後はリスボンの町を歩いて回った。暖色ベースの古い町並み。狭い街路すれすれに登るケーブルカー。広い美しい公園。テージョ河の春光を映す輝き。すべてが優しく柔らかく、静かな愁いに満ちていた。大航海時代への回想からか。地震や海難の多い土地柄からなのか。これがsaudade（サウダーデ）というものか。「空は青く空気は澄みて旨けれど愁ひ含めるリスボンの春」。これがリスボンで詠んだ二首目の歌であった。

思えばブラジルで知り合った日系人たちもsaudade（サウダージ）という言葉をよく使った。ドヴォルザークが祖国ボヘミアを回想して作った有名な交響曲「新世界より」がもつ郷愁と同じサウダージを、日系ブラジル人たちはいつも感じるらしい。日本に帰ればしばらくブラジルにもポルトガルにもリスボンにも会えなくなる。ふたたび日本の土を踏む前のこの時から、私はすでに強烈なsaudade（サウダージ・サウダーデ）を感じ始めていた。ブラジルとポルトガルに対して。



空からみたカナリア諸島

大阪日本ポルトガル協会会員

会員寄稿文

『進化する企業の情報活用』

中 川 十 郎

日本企業における情報活動

1. 日本企業は戦後経済復興以来、ソニー、ホンダに代表される新興企業や、トヨタ、日産などの自動車産業、三菱電機、松下電器、日立製作所、東芝、シャープなどの製品が、米国の品質管理手法を取り入れ、生産に適用したため、品質上も競争力が向上し、あわせ労働賃金の競争力も相まって、日本製品の海外への輸出が激増した。値段も競争力があり、作れば売れて、海外にも大量に輸出された。日本のメーカー製品は当初は世界に比を見ない100年以上の伝統を有する総合商社を通じて外国に多く輸出された。

従い、85年のプラザ合意までは作れば売れるということで世界市場での競争情報収集には一部の企業を除いて、それほど積極的ではなかった。70年代の石油ショックまではそれほど競争相手の情報を必要とせず、商品の輸出マーケティングに関しては、総合商社を含めて競争情報(コンペティティブインテリジェンス)よりも市場情報(マーケティングインテリジェンス)収集に重きが置かれていた。

2. 日本に競争情報(Competitive Intelligence)、ビジネスインテリジェンス(Business Intelligence)の概念が持ち込まれたのは1990年代からで、『CIA流戦略情報読本』(Ben Gilad. Tamal Gilad 著 “Real World Intelligence” - 邦訳『CIA流戦略情報読本』中川十郎、米田健二共訳、ダイヤモンド社1990年9月)がその先駆けとも考えられる。それまでは企業においても官庁においても「競争情報(CI)」や

「ビジネスインテリジェンス(BI)」などの概念はなかったものと思われる。

この本がきっかけで、当時東芝の役員や、地方公共団体(たとえば岐阜県庁、宮崎県庁、中小企業事業団など)から、BCIの講演要請がなされるようになった。しかし受講者にはBIやCIの言葉や概念は初めてであった。

日本の総合商社や、官庁一特に通産省、外務省などでも競争情報の概念はなかったようである。ただしこれらの企業、官庁では独自の国内外の情報収集はしていたが、情報教育を従業員や官吏に特に施していたとは思えない。日本の第2次世界大戦での敗北の主因が情報の軽視と活用の仕方が誤っていたことが原因であったにもかかわらず、戦後の企業や官庁での情報収集、活用が組織的になされていなかったことも今日、日本が30年以上もGDPがほとんど増加せず、G7においてもGDP成長率が最低である原因の一つであろう。

3. 筆者は上記翻訳をして以来、三井物産、ニチメン(現双日)などや情報研究会、講演会などで競争情報やビジネスインテリジェンスに関する講演を行ったが、それが企業に活用されたとは思えない。

日本の総合商社の三菱商事、伊藤忠、住友商事などでも聞き取り調査をしたが、日本の企業では、収集された情報が情報本来の経営戦略に活用されているのはまれであるとの印象であった。

要するに日本の企業では情報やデータはマクロの売り上げ拡大に活用されている程度でトップマネジメントの経

営判断や経営戦略に活用されているケースは少ないと思われる。

4. 近年、話題になっている、Big DataやIOT, AIなどの分野でも、第1線の営業部門のミクロの活用が主体で、海外市場動向や経営戦略の策定にまでアウフヘーベンされているとは思えない。ここに日本企業の情報収集、分析、活用の限度と問題点があるようである。
5. よって日本企業においてはまず、現場第一線の営業部隊はもちろん、経営層へのBI, CIの活用に対する教育が、必須と思われる。
6. 過去、10年にわたりBISと明治大学商学部・篠原教授が連携して秋期に明大リバタイアカデミー講座で毎回10回にわたり、「ビジネスインテリジェンスとグローバルマーケティング」講座を開講しているが、受講者は中堅幹部が中心で、企業の役員クラスの受講は皆無なもの日本企業における情報収集、分析、活用に関する関心が薄いことを表しているように思われる。
7. かつて、1970年代から80年代にかけてイランでの巨大化学プラントプロジェクトで三井物産が当時の金額で4000億円の損失が発生した。結果、三井物産は情報の重要性を認識し、海外5000台、国内7000台のPCを活用し、経営幹部向け、経営情報、意思決定支援システム (EIS)、各種システムへのリスク対応システム (RMS) を構築した。このシステムのおかげで三井物産は1997年の通貨危機を乗り切り、他社が莫大な損失を出したが、三井物産は逆に利益を計上したという。この例は1973年の石油危機、1990年代のソ連の経済崩壊を事前に予知して日頃から情報を綿密に分析、活用していた

石油多国籍企業のロイヤルダッチシェルの成功に比肩できる日本総合商社の良き事例と思われる。

一方、93年から94年にかけて銅の投機による住友商事の2800億円の損失、1970年代にカナダの製油所プロジェクトで1000億円の損失を出し、破産した安宅産業の事例と比較し、情報の収集、分析、活用がいかにか切かを物語っている。日本企業においては未だにビジネス情報の収集、分析、活用が企業の経営者層の間で十分でないことが痛感される。

8. 特に最近日本企業で頻発する企業不祥事では日本企業での順法精神の劣化のみならず不祥事を事前に察知する情報システムの不備と不全が原因とみられる事例が多発している。
9. 第二次世界大戦の日本の敗戦の原因の一つに旧日本軍の情報軽視があったと言われているが、ドイツの「Industrie 4. 0」米国の「Industrial Internet」、中国の「中国製造2025」に対する日本の「Society 5. 0」戦略も現実には理論の域を出ておらず、欧米、中国に大幅に出おけているが、ここでも日本の製造業における情報そのものの認識が欧米に比べて遅れており、後追いの感が否めない。
10. BIS (日本ビジネスインテリジェンス協会) は約200人の会員で、1992年2月に創設以来、隔月で情報研究会を28年の長きにわたり開催してきている。これまでの累計参加者15,000人、講師累計500人を数える。
当初の10年間はビジネスインテリジェンスの理論面を主体に研究してきたが、その後は企業の管理職を中心に講師に呼び、情報の現実面での活用法の研究を中心に据え、実務者の現場の情報を通じて、情報収集、分析、活用を主体に研究活動

を継続してきている。

さらに近年、日本では2人に1人がガンにかかり、ガン患者の3人にひとりが死亡するという現実に直面し、過去10年間はメデイカル・インテリジェンスについても医療関係者~特に、国際融合医療協会、アユルベータ医療融合協会、国際伝統・新興医療融合協会と協力し、医療情報の研究を強化している。今後ともインド、スリランカ、中国などとの伝統医療情報研究、インバウンド、アウトバウンド・メデイカルツーリズムなど医療インテリジェンス研究にさらに注力したいと考えている。

11. その実例として2018年には1月、BISから中国天津に健康医療ミッション18名を派遣。天津関係者との経済、医療分野での協力を強化することにした。また4月には西安・楊凌での先端農業、健康医療分野で協力すべく、ミッションを派遣。7月にはスリランカのアユルベータ研究に関係者が出張。9月には鳩山元首相が理事長の東アジア共同体研究所に協力し、中国・山東省濰坊市の中日韓産業博覧会に中川が参加し、発表を行った。

さらに10月には中国・内モンゴル、および大連での温室有機栽培ミッションに参加。

食の安全、安心のためのフーズインテリジェンス研究も開始している。11月にはBIS関係者50名からなる農業、食料ミッションが陝西省・西安・楊凌の第25回先端農業世界博覧会に参加。農業インテリジェンス分野での日中協力に尽力した。

21世紀に食料、環境と並んで重要なエネルギー分野の研究でも「BIS日本再生エネルギー部会」を設け、過去4年間、3か月に1回の研究部会を開催。再生エネルギー研究をエネルギー専門家をまじえエネルギーインテリジェンスの活用のための研究を続けている。

このように日本ビジネスインテリジェンス協会（BIS）ではビジネスインテリジェンスのみでなく、メデイカルインテリジェンス、フードインテリジェンス、エネルギーインテリジェンスの研究も総合的に継続している。

12. 上記の目的を達成する為、BISにおいては、米国戦略競争情報協会（SIS）、中国競争情報協会、豪州競争情報協会、印度情報研究所、フランス競争情報協会に加え、米コロンビア大学日本経済経営研究所、豪州国立大学アジア研究所、中国社会科学院、対外経済貿易大学、天津商務局、楊凌自由貿易実験区、日本ではJETRO、世界銀行日本事務所、ASEAN研究所、アフリカ銀行、アジア共同体評議会、鳩山事務所・東アジア共同体研究所、日本商工会議所、国際アジア共同体学会、アジア・ユーラシア総合研究所、大阪大学国際情報研究会、NEASE-NET（北東アジア研究交流ネットワーク）、一帯一路日本研究センター、日本貿易学会、22世紀学会、名古屋市立大学22世紀研究所、EU代表部、日本駐在各国大使館などとのビジネス情報交換に日頃努力し日本でのビジネス情報活用に尽力している。

13. 現在、米中貿易戦争が熾烈を極めていく。特に知財に関して米国は中国の「中国製造2025」をやり玉に挙げ、中国政府がZTEやファーウェイ経由米国の先端技術を不法に入手していると非難している。ファーウェイの副会長の米国への引き渡しや、豪州、日本などに同社製品を購入しないように圧力をかけ、両国は政府調達でのファーウェイ製品の購入を停止した。

1980年代に日米貿易摩擦が激しかった折、米国との貿易不均衡を是正する為、日本の自動車輸出数量規制や米国への投資拡大。さらに1985年にはプラザ合意で

米国から円の大幅切り上げを要求され、それを当時の竹下政権は受け入れた。その結果、その後30年以上にわたり日本経済は低成長にあえぎ、GDP成長率はG7の中でも最低となり、年1%内外に低迷している。

今回はトランプ政権の不満が大幅な対米貿易黒字を出している中国に向かっていっているわけである。まさしく「歴史は繰り返す」だ。貿易は比較優位の原則で安い製品が輸出においても優位を占めることは自明である。それを特に先端技術において中国のファーウェイやZTEが米国の技術を盗んでいるとして激しく批判している。

かつて日本の東芝機械が工作機械をポーランド経由ソ連に輸出。その結果、ソ連は潜水艦のプロペラの消音に成功し、ソ連潜水艦への追跡が難しくなり、米国の国家安全保障に重大な損害を与えたとして、米国は東芝製品の対米輸出を禁止し極端な東芝たたきを行った。東芝は米国の新聞に全面謝罪広告を出すなどさんざんな目にあった。

しかし、後でわかったことはソ連潜水艦のプロペラの消音はソ連では東芝工作機械の輸入前から実現していたと言うことで、東芝はあらぬ濡れ衣を着せられ日米貿易摩擦の生贄にされたのである。当時、日米の貿易不均衡は大きく、米国の日本たたきは、日本製トランジスタラジオや自動車を米国人労働者がハンマーでたたき壊して氣勢を上げるほどエスカレートした。さらにクリーブランドクリニックでアルツハイマー病の研究をしていた日本人化学研究者二名がアルツハイマー病の研究試料を不法に盗んだとして嫌疑をかけ、1996年に施行した経済スパイ法（Economic Espionage Act）を初めて適用し、日本人研究者を逮捕、起訴した。この行為は今日のファーウェイの副会長の逮捕にも通じる米国の常套手段の

ように見える。

米国は中国がスパイ行為で米国の技術を盗んでいると世界的に非難しているが、米国は1940年代以降、英国、豪州、ニュージーランド、カナダとともにアングロサクソン5か国で世界的に悪名高いスパイ衛星9基を赤道上に打ち上げ、軍事情報のみならず技術、経済情報を不法に入手していることを批判し、欧州議会が調査した実情をどう説明するのか。

米国、英国などの諜報機関の非倫理的な活動はスノーデンの勇気ある告発で暴露された通りである。これらの5カ国政府のエシュロンの組織的な諜報活動を棚に上げて、中国の一企業のファーウェイたたきに血眼になっているトランプ政権のやり方は問題である。

ファーウェイを批判する前に米国はまずおのれの非を正すべきではないだろうか。

以上

日本ビジネスインテリジェンス協会理事長
名古屋市立大学22世紀研究所特任教授



会員寄稿文

「ミステリ小説断想」(10)

福 富 直 明

1. 読書というもの

アガサ・クリスティーが1926年に発表した『アクロイド殺し』はミステリ小説のファンなら誰でも知っている作品だ。しかも、まだ読んでいなくても、誰が犯人か知っている人も多い。知らずに、誰が犯人か推理してやろうと身構えて読むと、結末で驚く。中学時代に読んで犯人の意外さにあっけにとられたし、(小説作法として)こんなトリックがあったのかと感心した。欠点と言えば、このトリックは二度と使えない類のもので、現代の作家が同じトリックを使ったら、馬鹿にされるだけだろう。出版された当時にも、このトリックが読者にとって、フェアかアンフェアか議論を呼んだという。

1998年にフランスの文学理論の大学教授で精神分析学者のピエール・バイヤールが『アクロイドを殺したのは誰か』という評論を書いた。これが何とも愉快的な本で、『アクロイド殺し』を詳細に分析してクリスティーが殺人犯だと明かした人物は犯人ではない、犯人は別の誰それであると理路整然と推理している。つまり、クリスティーが読者に提示したのと同じ手掛かりを使って、違う結論を導き出しているのだ。この評論は2001年に邦訳が出て、ミステリ読者の間で話題になった。たしか1800円くらいの本だったが、絶版のため現在では6000円前後の値段がついている。バイヤールはさらにコナン・ドイルの作品についても『シャーロックホームズの誤謬—「バスカヴィル家の犬」再考』を書き、ここでもホームズの(というか、ドイルの)推理の誤りを指摘し、違う真犯人を名指している。シェークスピアの『ハムレット』の父親の王を殺したのはクローディアスではないと立証した論文(未訳)もあるという。作者

が提示した資料から異なる結論を引き出すというバイヤールの知的な解析力には驚嘆せざるを得ない。

バイヤールには『読んでいない本について堂々と語る方法』という著書もある。一見ふざけた内容を思わせる題名だが、読書や教養の意味を追求した論文らしい。実はこの本は読んでいないので、堂々と語るのは控える。拾い読みすると、例えば、読んだ本について語り合おうとしても話がかみ合わないのは「深層において異なる、互いに相容れないとすらいえる二つの教養の対決」なのだと言っている。前掲のミステリ評論書よりもこの本のほうが有名である。同じマンションに住む金融関係の人がこの本を持っていた。大学の講座を引き受けることになったので、読んでおこうと思ったというから、題名に惹かれて、堂々と講義するこつを書いたハウツー本だと誤解したらしい。

『【罪と罰】を読まない』という変な題名の文庫本を見つけた。作家、翻訳家、デザイナーなど四人(三浦しおん、岸本佐和子、吉田篤弘、吉田浩美)が顔を合わせたときに、四人とも『罪と罰』を読んだことがなく、ラスコーなんとかいう若者がばあさんを殺す話じゃなかったっけ?という程度の知識しかないことが判明。他方、読んだことがあるという作家、評論家、翻訳家、編集者、書店員など”小説”に携わるプロに訊ねると、昔読んだけど主人公のラスコーなんとかがおばあさんを殺すんですね?と、読んでいない人とあまり大差のない認識であることが分かった。それで、「読んだ」と「読んでない」に大差がないなら、読まずに読書会を開けるのではないか、四人が持っている数少ない情報を寄せ集めて、

『罪と罰』はどんな物語なのか、話の筋を推測し、作者の意図や登場人物の思いを探り当てる読書会をやってみようということになる。最初の集まりで『罪と罰』の最初と最後の1ページが配られて未読書会が始まる。この本は四人の座談会の記録なのだが、ともかくいずれも、創造力と空想力に優れた知識人なので、奔放な展開、暴走、脱線、意外な推理などが入り混じって、なんとも面白い本に仕上がっている。『罪と罰』を読んだことがないのだけど、それでも面白かった。

結果として、四人の座談が『罪と罰』という古典大作の詳細をとことん突き詰めた、読みやすい評論・研究書になっており、『罪と罰』を読んでも読んだような気分になれる。同時に本を読むということは、どこまで深く、あるいは浅く読むべきなのか、おのれの姿勢を反省する気分になる。彼らは読んでいない本について堂々と語ることを実践したわけだ。しかしバイヤールについては、まさかこの人たちが読んでいないとは思えないのだが、一行の言及もない。

座談会のテキストには光文社と新潮社の文庫本の『罪と罰』が使われている。ドイツ人の女が警察で事情聴取されていて「大尉どの、うちの店、上品ですよ」と言って、少なくとも前後3回は「大尉どの“が出てくる場面を三浦しおんが光文社版から引用している。警察で大尉どのというと、軍事警察のように聞こえる。読んでいないから、軍警か民警か分からないのだが、英米の場合、警察署長はcaptainであり、captainには大尉の意味もある。そう考えると、ロシア語でもカピタン(?)みたいな言葉で、大尉と翻訳したのは署長の誤訳なのではないか。というか、誤訳であると堂々と言いたくなる。で、本屋に行って、新潮文庫版を数分立ち読みしてみたら、こっちのほうはちゃんと署長と訳されていた。

2. RとLの問題

と言っても、右翼・左翼の話ではない。カラチに駐在していたとき、日本語の達者な

パキスタン人が、日本人はなぜ林檎をringoと書くのかという。何を言おうとしているのか戸惑ったが、彼の言うには林檎を日本人は“lingo”と発音しているというのだ。彼の疑問は、ラ行の音を“R”に統一してしまったヘボン式の欠点を指摘していたと言えよう。バイリンガルの帰国子女に訊いてみると、日本人はラ行の音で始まる言葉のほとんど全部を“L”の音で発音しているという。なるほど、六本木、列車、ラーメンは確かに“L”だ。それどころか、“R”で始まるradio, racketなどもladio, lacketと発音している。日本語には昔から“L”と“R”が混在していたようで、1788年に書かれたオランダ語入門書『蘭学階梯』ではラ行は“L”で表示されているとのことだ。

日本人が概して“L”と“R”の発音を使い分けるのも、聞き分けるのも苦手なのは、この混在のせいであろう。英語圏の人に、日本人がHollywoodというHorriwood, waitressというweightlessに聞こえたりして、からかわれる。

新しい元号の令和のアルファベット表記は“REIWA”であると政府が発表した。これについて東大の小島毅教授という人は「REIWAより実際の発音に近いLEIWAにしたらどうだろう」という意見を新聞に載せていた。“実際の発音に近い”とは妙にデリケートな言い方である。

ニチメンと付き合いのあったアメリカ人のプラントエンジニアとヒューストンで再会したら、こんな話をしてくれた。彼が社内で日本・アジアのプラント商内の状況の報告会をしたとき、ときどき何人かが顔を上げて変な表情で彼を見る。終わってから親しい友人に、おれ、なにか変なこと言ったかねと聞くと、ともかく自分のスピーチを録音して聞いてみろよという。それでテープに入れて聞いてみて、RとLがごちゃ混ぜに入れ替わっているのに気が付いた。彼は日本に長かったから、郷に従った結果になった。

会員寄稿文

庭園めぐり(第3回花めぐり)ウォーク

大 羽 陽一郎

今年最大級の台風19号が関東に近づいているという状況下でしたが、実行当日の10月10日は、正に嵐の前の静けさとも言える好天に恵まれました(これまでのジンクスが守られました)。参加者は前回より増えて14名(石原、奥村、川西、蛭田、斎、五十畑、青木、近藤、赤城、大場、大羽、木津、滑川、入江)となり、集合時刻の10時には王子駅に14人全員が揃い、いざ出発。

◎飛鳥山公園

王子駅を出て数歩歩くと、目前に飛鳥山公園と書かれた標識と共に、ケーブルカーらしき箱型の乗り物が現れました。係員のおじさんが「大丈夫、20人は乗れますよ、直ぐに発車します」と言ったので、全員慌てて乗り込みました。この「アスカルゴ」と名付けられた運賃無料のモノレールは、駅前歩道から飛鳥山山頂まで僅か2分で登り、車いすやベビーカーもOKとのこと。

東京都もいろいろな細かい便宜を考えているんだなと感心させられました。モノレールを降りて公園の敷地内に入ったところで、早速、リーダーの奥村さんからウォークルート及び注意事項の説明を受け、軽くストレッチをしました。ところが、最初の見学施設ともいべき渋沢資料館と紙の博物館が共に休館中で見学できず、いきなり出鼻を挫かれた感じでした。

この飛鳥山公園は江戸時代に八代将軍・徳川吉宗が、庶民の行楽地として千本以上の桜を植えたとされ、以来、現在に至るまで桜の名所として親しまれています。そして、公園の南はずれの旧渋沢庭園では、「青淵文庫」と「晩香炉」を見ることができ、近代日本の経済発展に貢献した偉人渋沢栄

一の人間性の一面を垣間見ることができたと思います。

◎西ヶ原一里塚

渋沢庭園の後、本郷通り(御成街道)を田端・上野方面へ歩きました。途中、道路の真ん中に大木と「西ヶ原一里塚」刻まれた石碑がある。この一里塚は江戸幕府が諸街道整備のためにほぼ一里間隔に築いた目印のようなもので、東京23区内に18か所あったものの一つだそうです。



一里塚

◎旧古河庭園

更に本郷通りを少し進むと、立派な門とその奥に大きな洋館風の建物が見えました。門には旧古河庭園と書かれた大きな表札が掛かっています。入口のサービスセンターで、古河庭園と六義園の2か所に入場できる共通入場券「園結びチケット:200円」を全員が購入しました。

入場すると、直ぐに広い花壇があり、一面、真っ赤なバラに覆われていて、まるでお伽の国の世界に飛び込んだような気分になりました。花壇を進むに連れて、赤だけでなくピンク、橙、黄、白、青等の様々な

色彩があり、また、紋様も縞、波、曲線、斑点等 多種多様であり、本当に面白いと思いました。また、各々の花の前には過去から現在におけるその花の命名者や、その花を最も愛した人物（大半が女性ですが）の名前を記した名札が設置されており、更に興味をそそられました。

この古河庭園は、北側斜面には洋館と洋風庭園があり、南側低地には池や滝を含む日本庭園があり和洋併置の庭園であるとのこと。正に今が満開のバラで埋め尽くされたテラス式庭園の途中階段を利用して、見学中の女性に集合写真のシャッターをお願いした。



旧古河庭園

◎ランチ

古河庭園を出た後、駒込駅近くの中国人経営の「餃子専門店」で昼食、皆さん、本場の味に満足されていたようでした。

◎六義園（りくぎえん）

駒込駅を過ぎてほんの少し歩いたところで、再び立派な門が見えました。その門に「六義園」と書かれた表札が掛かっています。そこで、古河庭園で買った「園結びチケット」を提示して入って行くと、直ぐに巨大な枝垂桜の木が現れました。「ここは以前に来たことがある。」と数人が異口同音に話されていました。確かにこんなに大きくて立派な枝垂桜は珍しいので、人気の名所となるのも無理はないと思いました。もう少し進んで行くと大きな立看板があり、六義園の由来や歴史、園内構成等の詳細情報が書かれていました。

「とにかく広そうだから、経路の標識に沿って順番に見て行きましょう」とのリーダーの言葉に従い、皆、ゆっくりと着実に歩み始めました。最初に現れた滝見茶屋で



六義園 2019/10/10

は、「結構大きな滝があるんだ。」と何人かが感心したような声を上げていました。そのうち、吹上茶屋の辺りから次第に歩道の上下りが増したり、段差や木の根につまづきそうになったりと歩くのが大変になってきました。更に、細長い岩板だけで造られた「渡月橋」を渡る時は、一步一步慎重にゆっくりと歩かざるを得なくなりました。その先では、池の中にある「中の島」に入ることが禁止だったため、反対の陸地側に進むと、いくつかのベンチを備えた休憩地があり、そこは萩と紫陽花に囲まれていました。紫陽花はもう咲いていませんが、萩は真っ盛りで綺麗でした。

そして最終ゴールが近づいた休憩所前のベンチでは、全員が陣取って座り、「あー疲れた」と言いつつ、大池を眺めていました。この辺りは高い木が多く林のようになっており、直ぐ近くの木はまるで魚の鱗のような樹皮に覆われています。突然、誰かがこの変わった大きな木に付いている名札（「杵の木」と書かれている）を見て、「これ何て読むんだらう？」と呟きました。

すると、奥村リーダーがドヤ顔で、「イスの木と読むんだよ」と答えました。そして彼はゆっくりとその木に近づき、名札をひっくり返して裏を見たところ、「イスの木」と読み仮名が書かれていました。「何だ、もっと早く裏を見れば良かった。」と、皆、一斉に大爆笑。

この六義園を見終えたところで、石原会長が、「所要のため、ここで失礼します。」と、帰路に就かれました。（遠方より参加頂き、お疲れさまでした。）

その後、六義園を出て、住宅街を通り、巣鴨駅方面に向かいました。

◎とげぬき地蔵

巣鴨駅前を通り、白山通りから巣鴨地蔵通り商店街に入り少し進むと、正面に「と

げぬき地蔵尊本堂入口」という横断看板が見えたので、それに従い境内に入ると、そこはお年寄りや車椅子に乗った身障者とその付添人で溢れんばかりの状況でした。本殿を参拝した後、境内広場に設置されたベンチに座り、茫然と辺りの風景を眺めていましたが、「自分もいつか斯様な神仏頼みをする事態になるかも・・・」と、気掛りになりました。

その後、巣鴨駅に戻り、「お疲れ様でした」の合図で一斉に解散、帰路に就きました。

尚、有志の方々による所謂「反省会」では、本日の感想、次回開催候補、昔の話などワイワイガヤガヤと盛り上がりました。

今回初めて社友会の役員、世話人以外の川西様、斎様、五十畑様、滑川様に参加頂いた事を大変うれしく思うと共に、今後社友会の会員の皆様同士での散策や、昼食会等の様々な交流が生まれることを期待しています。

以上



会員寄稿文

『もう見たくない:民放テレビ』

倉 持 次 雄

民放テレビには良い番組が沢山ある。

そういう番組を実は見たいのだが、近頃どうしても見ることが出来ないでいる。

その理由となっているのが「テレビ・コマーシャル」だ。

コマーシャルの中で、英語まがいの単語や、その間違ったカタカナ表記や、間違った発音を堂々と喋っているのが多すぎて、不愉快極まるからだ。

加えて、このようなコマーシャルは、「小学校低学年から英語教育が必要だ」との風潮になっている今の時代に、英語を習い始めた子供達に害毒を流していることと同じなのだ。

以下、愚生が気づいた具体例を、いくつか列挙する。

広告主・広告制作者・テレビ局、全てに対して猛省を促すと共に、即刻訂正願いたいと思っているものである。

* 「Indeed」…

発音「インディード」。(語尾、日本語の「ド」のまま、わざわざ強調して発音してる。)

…→本来の英語は「インディー」だ
(「ディー」を強く、「ド」は軽く。)

* 「PRIOR」…

わざわざ「プリオール」と仮名を振っている。せめて、英語風に「プライアー」と振って欲しい。

* 「モアリッチ」…

これでは零点だ。初級の英語で叩き込まれたのが、rich, **richer**, richest だ。

* 「Boat Race Derby」…

「ボートレース デービー」と、大声で発音してる。

「デービー」とは何だ!! あの有名なDerby: 本来の英語は「ダービー」だ。

* 「Be the Change!」…

これ意味不明!

(脚注)

① 昔からの「カタカナ言葉」については、ここでは不問に付する。

(長年の間に定着して、ほぼ「日本語」となっているから。):

(例)・コーヒー (←coffee)・ガラス (←glass)・コップ (←cup)・ビール (←beer)

② 尤も、「パソコン」は? 「ファミレス」は? などなどもある。

日本語が柔軟性に富んでいるためか? キリがないので、この辺は改めて機会を探す所存。

以上、お読み下さった会員諸兄姉、如何でしょうか?

(おわり)



会員寄稿文

ニチメンアーカイブス:あのビルに会いたい

奥村 睦夫



1931年竣工時の近三ビル：7階建て



令和元年10月の近三ビル：* 8階建てになってる
*江戸通り対面に高層の「COREDO室町テラス」



令和元年10月の旧宝町ビル ↑



三田NNビル ⇒
1995年9月移転



大阪本社ビル今昔 :



竣工時は六階建て、旧ビル、日銀大阪支店



↑ ↑
朝日新聞社、フェスティバルホール、グランドホテル
住友生命、日綿実業：7階建て、旧日本綿花本社、日銀大阪支店
*左の土佐堀川、右の堂島川の中州が中之島
*阪神高速環状線が見えないので1960年代初めごろの空撮と思われる



3代目ニチメンビル ↑
2016年2月撮影（淀屋橋交差点より）

会員寄稿文

オー・カルカッタからヘルシンキまで

長谷川 洋

いきなり Oh, Calcutta と謳ったが、アメリカのかのミュージカルのことではない。

今年8月の社友会・総会で 大先輩の直井明さん、こと福富直明さん（29年入社）が、“長谷川君、きみはインド・カルカッタにも駐在したでしょう、この本は、面白いよ”と言って、教えてくれたのが“ハヤカワ・ミステリー、“カルカッタの殺人”だった。

海外ミステリー小説の権威として夙に有名な福富さんの推薦なので 直ぐに買い求め、読み始めたが、一気呵成に徹夜で読むほどの面白さだった。

英国Scotland Yard、ロンドン警視庁から英領インド帝国・総督に招かれて、派遣されてきた警部が遭遇する事件の物語。1919年のカルカッタが舞台。

小説の中に出てくるフーグリ川、ハウラー橋、チョーリングー道路、パーク・ストリート、ウイリアム要塞、モイダン広場、グレート・イースタン・ホテル、吾がニチメンのオフィスのあったダルハウジー・スクエア ETC. なんとも懐しい光景だ。

大英帝国の東インド会社のインド進出の拠点、そして以後のインドの植民地化のための橋頭堡となったカルカッタ（現在はコルカタと称する）。“宮殿都市”、“喜びの都市”とも呼ばれた。

ニチメン入社5年目に、大阪輸出機械部にいたとき当時の満嶋常務から突然、“長谷川君、きみは歳は何ぼじゃ”と聞かれ、“もう直ぐ27歳です”と お答えしたら、“で

はインドに行ってくれ”の一言で、Calcutta 支店駐在が決まった。

1962年12月、宝塚の独身寮から一足飛に、香港、バンコク経由、ルフトハンザB707で、インドの地に降り立った。

ダムダム空港に降り立ち、市内に向う道程、人また人、喧騒な街、大変な所に来た、と思ったのが実感だった。瘴癘の地として夙に有名なカルカッタに遂に来たか、と思った。

社宅は 近代的なマンションで、冷房完備、冷蔵庫もあり、先ず一安心。

食事の時には、胸にニチメンのマーク入り白い制服を着たベアラー（Bearer）；使用人が二人もテーブルの脇に立って、かしづいているではないか。

朝は朝で、ベアラーがMilk Teaをベッド・サイドまで、持って来る。

ゴルフに行くときは、道具は、ベアラーが車まで運ぶ。

宝塚の独身寮のDIY生活とは天と地の相違だ。それからは、俄か作りの和製“マハラジャ”生活が始まった。

独身の身で、一時帰国も無しに、3年3ヶ月カルカッタそして最後はニューデリーで過ごした。

17世紀末には、カルカッタに到達し、商館を開設した大英帝国、東インド会社の社員は200年余の間、自分たちの住みよい環境としての都市作り、使いやすいインド人の雇員を訓練したと思われる。何事も“マスター FIRST”の慣行だ。

仕事でインド各都市、街々を訪ねた、北から南まで。ヤンマーエンジン・ビジネスで最南端のコモリン岬に行った時は、地球が丸いのが この眼でよく分かった。

各社駐在員とは、仕事を離れて、お互いに COHESIVE で、仲良く遊んだもの。

麻雀、ゴルフ、各社宅訪問、カラオケ大会 ETC. はたまた、ダージリン旅行も思い出の白眉だ。エベレストは登るより観るがいい。

当時、インドにも、国際交流基金の派遣かどうか、日劇ダンシングチームが来た。

当時のスター、重山規子、藤井輝子などが来た。干天に慈雨のようだった。

もっとも 日頃、インドの美人にも RECEPTION 等でよく会った。

ビビアン・リーのような美人もいた。目の保養になった。

インドについて語れば一冊の本になるが、インド編は此処までとして、次に飛びます。

1966年 帰国し、結婚し三児の親となり、大阪から東京へ転勤。練馬の社宅に入り、仕事は矢張り Yanmar 商いを主に担当し、午前様の生活を続けていたが、1971年、韓国 SEOUL 支店駐在となる。

当時は朴軍事独裁政権時代だった。夜間外出禁止令も出ていて、何となく陰鬱な気分だったが、昼間の仕事は堂々と調達庁と交渉し、こなしてきた。ソウル大出身の韓国の役人は優秀だった。

日韓請求権協定（1965年締結）より数年は経っていたが、無償・有償合わせて1,800億円相当の対韓経済協力は、まだ使用可能だった。

従って、ヤンマーエンジン、灌漑用ポンプで ニチメンも成約することができた。

この請求権協定は、所謂“PAC協定”と称して、AGREEMENT … CONCERNING PROPERTY AND CLAIMS, (PAC) … AND ECONOMIC COOPERATION については COMPLETELY AND FINALLY SETTLED. と明記されており、今更“徴用工”問題は、ありえないこと。上記協定書で、解決済みのこと。日本政府の主張の通りである。

今や、50年近くにもなる吾が SEOUL 時代。往時茫々ではあるが、楽しきことのみ思い出に残っている。美女美女にかしずかれた韓国料理は美味しかった。

次なる駐在地、THAI 国、BANGKOK。1978年に赴任。今度は家族連れだ。

HOT、HOTTER、HOTTEST の国。この地には、吾が原動機部の合弁会社の YANMAR THAILAND もあり、人の往来が盛んだった。

西から東から来客が多く、毎夜、毎夜のアテンドに忙しく、夜の会食、昼はゴルフ、麻雀も頻繁にやったので、わが家族には済まないことをしたと今頃思う。

当時、ヤンマーのサッカーチームが釜本監督に率いられてタイに来て幾試合かしたが、小生が担当して、バンコク銀行などとの対戦のアレンジを交渉をした。

釜本さんは、メキシコ・オリンピックで日本代表のエースストライカー。

ゴルフの腕前もすごかった、アイアンでドライバー並みに飛ばしていた。

1982年、4年間の駐在を終えて帰国したが、駐在中、わが娘や息子たちがタイ人の悪党にさらわれない様に常時注意を払っていた。

羽田空港に帰着した時には、ほんと安堵したのを思い出す。

暫く間をおいて、またまたインド駐在、

1986年、ニチメン派遣のインド総督として首都ニューデリーに駐在。街は近代的に整備され 邸宅が立ち並ぶ街。

20年ぶりのインド再訪。慣れたインド、何の心配も無かったが、インド人相手に苦勞も多かったが、楽しい思い出も沢山ある。

毎夜毎夜、各社の皆さんと随時訪問したり、招いたり、麻雀とカラオケの日々だった。

日本人会忘年会（ホテルで）、では、三年連続オペレッタ劇の主役を演じた。

監督・脚本は毎日新聞Mさん。インドに在って、皆、故郷忘じがたし、との思いだった。

当時の大使、各社店長クラスとの“インド会”は、もう30年近く続いている。

インドでの絆は、何故か強い。

ある人たちは既に逝き、残る者も皆、白髪のお爺さんになってしまったが。

最後の駐在国は、フィンランドはヘルシンキ、北欧の高福祉の国。

JETROよりの派遣で、フィンランド海外貿易協会に ただ一人の日本人として駐在。

日本語は何処からも聞こえてこない。インド-韓国-タイ-インドそして今、北欧まで遙けくも来たものだ。

森と湖の国、今までのアジアとは全く違う雰囲気。みんな生活を、人生を楽しむこ



ヘルシンキ港

とを最優先している。見習うべし日本人。従って、夏休みはほぼ一ヶ月も休む。

おかげで、北欧各国、ロシアまで旅行が出来た。

フィンランドは、スウェーデンの統治下にあって、その後 ロシアに割譲され、1917年ロシア革命のときに、独立宣言をしたものの、ロシアとの間には、1941年の冬戦争、1943年の継続戦争で、争い、敗北し 戦後、莫大な賠償金を払ったものの、1952年（昭和27年）には、ヘルシンキ・オリンピックの主催国となった。

このときのマラソンの金メダルは、あのザトベックだった。日本のレスリングは石井庄八選手が矢張りメダリストだった。

ヘルシンキ時代のハイライトは、JETRO会議で（ベルギーのブリュッセルで）当時の通産大臣森喜朗元総理（現2020TOKYO組織委員長）とお会いし歓談したこと。

会議の最中に、小生のプレゼンを聞いた森さんは、“長谷川さんをフィンランド大使に任命しなくては”と言ったが、これはその場のお世辞だったこと、はじめから明白。

この頃テレビに出てくる森さん、痩せ過ぎです。どうぞご無理をなさらぬように。

2020TOKYOの成功を祈って、筆を措きます。



1993年：ブリュッセル（ベルギー）で、JETRO会議の折、森通産大臣と

第7回ニチメン・シカゴ会

保 科 孝

5月25日（土）、東京青山の青学会館で、第7回ニチメン・シカゴ会が開催されました。

今回は85名の方にご案内、関西など遠方よりのご参加4名、また前回に続きご夫婦の参加3組で最終30名出席の会となりました。その様子を当日の写真を含めて以下ご報告致します。

会は12時から藤井敬三さんの司会進行で、初めにこの一年の間の物故者、岩田英昭さん、片井邦男さん、福本匡純さんに対する黙祷が行われご逝去を悼みました。次に発起人代表として三分一克美さんのご挨拶でシカゴ支店が6 north michiganに創設時の懐かしいお話を当時の古い地図を参加者分コピーしてご持参頂きご披露いただきました。次に米田信一さんの発声により乾杯と、前回に続きご夫人の参加で華やぎのある第7回シカゴ会のスタートとなりました。

しばし歓談の時間をはさみスピーチコーナー開始しました。今年は関西から参加の参加者中で2番目に若い岩本眞一さんから、元（関西）の上司2人に鍛えられ、そのことがその後たずさわった会社の上場に、また現在の上場会社の代表に招聘される原点とのお話、次にシカゴゆかりで初参加の秀真正彦さん、数森正彦さんからそれぞれシカゴ店との関わりなどを交えてのスピーチ、関西から毎年ご参加頂いている吉本邦晴さんより、既に鬼籍に入られた歴代のシカゴ支店長との親交について、また今年も関西から予定頂きながら参加が叶わなかった最高齢の辻井準一さんのシカゴ会への思いなど携えてと、それぞれにスピーチを頂きました。

次に御夫妻参加のスピーチ、昨年は4組のご夫妻に登壇頂いて全員スピーチで大変盛り上がりましたが、昨年ご参加の方々から毎年ご勘弁との雰囲気から、今年初参加の米田夫人よりご主人の介添えなしでとのご希望のもと、一言スピーチを頂きました。ご夫人方にとっては30年～40年前の駐在ならではの家族ぐるみのお付き合いから懐かしい再会も多く見受けられ、今後もより多くのご夫婦お揃いでのご参加いただくことが出来ればと思ったところでした。

秀真正彦さんよりもう一言お伝えしたいと、高齢になっての疑わしき症状にはくれぐれも手近な医院で済ますこと無き様などのアドバイススピーチをいただき、その後岩本さんのスピーチに触発された二人、小蒲智臣さんの現在も新規事業に投資中とのお話、浦野由紀夫さんの関わってきた事業と今など（両人は筆者と同じS50年同期）、昔の定年の歳を悠に超えて“まだ若き挑戦者”のスピーチに皆さんも聞き入っていたようです。

その様な具合で、司会の藤井さんが予定より早く開始したスピーチコーナーは、予定を超過しましたが、皆さんが楽しい時間を共有するものとなりました。

短い歓談のあと、五月女穰さんの中締めは、心筋梗塞にならないとのご指導付きの一本締めで皆さんの笑いも誘い、終わりに次回来年5月23日開催のご案内、若手世話人全員の顔見せ登壇、浅利真司さんの「次回は奥様から当時の奥様方にお声掛けするので皆様も是非ご夫人同伴で！」との呼びかけで締めとなりました。その後定例の反省会に約三分の二（19名）の皆様にも参加いただき、同じ青学会館の1階のカフェテリアでお茶とお酒で1時間超の2次会となり楽しい会を締めくくりました。

シカゴ会のメンバーは比較的若手が多くまだ現役として多方面で活躍中です。還暦前後での駐在、出張他の予定などで出席が叶わない人も多い中、今回も出席の約三分の二が戦後生まれで、他のOB会には見られない活力と元気を得られる会とも言われております。

今年もそこに、活力あふれるご夫人のご参加を頂き、華やぎのある会ともなりました。御夫

妻で参加いただきました、米田御夫妻、五月女御夫妻、安井御夫妻に紙面をお借りして改めて御礼申し上げます。そして次回も大いに活力と華やぎのある楽しい会にできればと願っております。

シカゴ会はシカゴ駐在のみならず、メーカーの方でニチメン・シカゴに駐在されていた方、また第3回の会からシカゴ支店にゆかりのある方にも広くお声掛けして参加頂いています。今回は第8回となりますが、場所は今回同様以下での開催となります。

シカゴの駐在員のみならず、ゆかりのある方も是非奥様同伴でご参加下さい。

第8回ニチメン・シカゴ会

日時：2020年5月23日（土曜日）11時半集合、12時開演

場所：東京青山 青学会館 3Fアロン

シカゴ会連絡先：保科孝（oshina_t@ab.cyberhome.ne.jp）

携帯：090-9059-0043



安井修司、安井夫人、五月女穰、五月女夫人、米田信一、米田夫人



後列：安井修司、五月女夫人、五月女穰、米田夫人、牧浦弘幸、池永浩、廣内卓生
前列：安井夫人、廣本昌也、吉本邦晴、三分一克美、米田信一、岩村久雄、秀真正彦、金井湧二



後列：保科孝、鈴木淳一、浅利真司

前列：木下龍三、藤井敬三、長谷川純一、大島教義、数森正彦、小蒲智臣、影山雄司、北野廣道



鈴木淳一、小蒲智臣、浦野由紀夫、岩本眞二、平嶋成晃、大島教義、藤久保俊三、北野廣道



第32回 如月会(ニチメン経理部OB会)報告

浅利 眞 司

2019年6月8日(土)青学会館アイビーホール(渋谷区表参道)において恒例の如月会が催された。1988年(昭和63年)―東京ドームの完成、青函トンネルの開通、長淵剛の「乾杯」が大ヒット・・・)にスタートしたこの会もあつという間に昭和平成令和と引き継がれ32回を重ねることとなりました。



毎年会社期末決算の繁忙期

を避けて2月に開催されていたことから如月会と命名されましたが、双日に統合後は、若い現役の参加が少なくなったこともあり、気候の良い6月に開催をずらして開催しています。なんとか20名を確保したいとの願いは叶わず、今回は16名の参加者で、ちょっと残念な結果となってしまいましたが、出来る範囲で継続していくつもりです。



11時30分開場、参加者全員の写真撮影を無事完了し、定刻通り12時に開宴致しました。いつもは、最長老の三分一克美さんに乾杯の音頭を取っていただくところですが、残念ながら今回は欠席で、世話人代表の名島憲一郎さんによる開会の挨拶、引き続き乾杯の音頭で会が始まりました。いつもの通り立食形式で三々五々、お互いの旧交を温め会

う懐かしい会話の輪が広がるひと時となりました。

会半ばよりは、はるばる大阪から参加の谷祥四郎さん、10年ぶりに参加していただいた秀眞正彦さんからスピーチを頂いた後、今回不参加の皆様からのメッセージの紹介等を挟んで参加者全員から近況報告をしていただきました。

最後に名島憲一郎さんより今回を最後に世話人代表の座を降りたき旨の報告と退任の挨拶があり、次回までに後任を募ることとなりました。

あつという間に制限時間となり、星野則和さんの発声で中締めとなりました。来年の再開を約束して、第32回如月会は、予定通り14:00に無事閉会しました。

さて、来年2020年は、33回目。下記スケジュールの通り、同じ季節、同じ会場で、開催する予定です。ニチメン経理本部に係る老若男女の皆さま、恙なく1年を過ごして頂き、また来年も元気でお会いいたしましょう！！

第33回如月会開催スケジュール

日時：2020年6月14日（土）12：00～14：00（開場11：30）
場所：IVY HALL 2F 「シャロン」
住所：東京都渋谷区渋谷4-4-25
電話：03-3409-8181

<集合写真> 第32回 如月会参加者（敬称略）16名



向かって上段左から

大羽陽一郎、福井芳樹、中村智幸、田中聡太郎、星野則和、浅利眞司、榊瀧磐夫、伊藤尚志、小竹浩之

向かって下段左から

村澤醇治、細井衛、山本裕昌、名島憲一郎、永田堅志郎、秀眞正彦、谷祥四郎

一木会開催報告

奥村 睦夫

日 時：2019年9月05日（木）11:30～

場 所：「味里＝みさと」 東京新橋駅前ヤクルトビルB-1 参加者：写真通り

今回も多数のご出席を得て、従来通りお昼のひと時を楽しく過ごせました。会場の「味里」がヤクルトビル建替えに伴い、本年末閉鎖との事で今回が最後となった。

味里さんには初会合から20年近くもお世話になり、ありがとうございました。

味里での「一木会」第一回開催は1999年6月、以降2009年頃迄ほぼ毎月開催、その後、年間開催数を減らし年6回、年4回、そして現在の年3回となりました。

正式な記録が残されていない為、又小生も途中から幹事を仰せつかったこともあり、正確ではないが、今回が約160回目ぐらいの開催だと思っております。

尚、会則・会長など役職・年会費無し、都度の実費精算、幹事はボランティア



各人近況報告：

- ・ロシア・台湾でも身体壊さなかった。ストレス持たないのが長生きの秘訣かな！
- ・終活始めた独居老人です
- ・先輩、同期、同輩、後輩に感謝！感謝！
- ・持病あり、家中で倒れた。が、引きこもり（？）人生を楽しんでいる。
- ・みんなと会って話すだけの単純さがいい！ 続けて欲しい！
- ・夏は北海道旭川、冬は横浜、行ったり来たりしてる。
- ・年取るのが不幸！昔の事、特に悪いこと全て覚えてる。ゴルフは続けている。
- ・「琴棋書画」すべてやりなさい
- ・ボランティアやってる。さるご婦人に手を握られ「帰らないで！」と言われた。
- ・特に言うことないが～ と言いながら結果的に10分ぐらいしゃべった。元気だ！
- ・腰痛い！ ステッキ使い始めた。うらみ辛みは口にチャックしてるが・・・
- ・木材業界:どの商社も同じだが木材部は我らの頃のような”力”は無いみたい！
- ・女子はOG会やってるようだし、我ら爺さん会にも来てくれたら嬉しいが・・・

*次回開催の1月9日(木)「美々卯」京橋店とするが、出欠とった結果。

出席表明は⇒①今井 ②大久保 ③小田 ④鏑木 ⑤杉野 ⑥菅野 ⑦青木 ⑧青井
⑨太田 ⑩柳田 ⑪武田 ⑫白石 ⑬鎌倉 ⑭松尾 ⑮奥村 : 15名

⇒⇒15名の参加表明を得て、会終了後「美々卯」訪問し予約しておきました。

- 「美々卯」京橋店 中央区京橋3丁目6-4 ☎03-3567-6571
- メインはうどんすき、会費は飲物次第で前後するが@6,000円程度か・・・
- 年齢も考慮し、2割減程度で注文します。例、20人出席⇒16人前注文

9月10日(火)「大阪社友会総会」に出席しました。写真の諸氏は東阪木材本部出身。



木材本部アーカイブス (あの人に会いたい) : 3件

① 昭和50年代初めごろだと思いますが、皆さん若いですねエ～ ・ ・ ・今井明さん提供写真



- ② 2007年7月5日開催の「一木会」：
⇒元気だったあの頃が懐かしい



- ③ 名古屋老人会：
⇒全員が南洋材担当でした：フィリッピン、マレーシア、インドネシアで苦勞しました。



以上

俳句の会「いろは句会」

佐藤 英二

「いろは句会」も、本年9月に第358回を終了し、令和時代の句会も順調に回を重ねています。30年近い歴史ある句会に参加ご希望の方は、ご遠慮なくお申し出頂きたくお願い申し上げます。

前号会報以降、本年4月から9月例会に投句された中から、各自の自薦による作品を以下の通り御披露致します。(氏名は50音順)

雨脚の見えざる湿り若葉雨 宇治田薫風
玉音の余韻はあの日夏の昼
秋彼岸僧も信者も老いて椅子

葉脈の互生対生手毬花 久保田悦子
刈り急ぐ一雨毎の夏の草
宅配便汗も一緒にもらひけり

春雨に見送られ往く新任地 佐藤 英二
厳かな皇室の儀に初夏の風
喧噪の跡残す浜秋の海

青空に真白き富士や花の冷え 下川 泰子
松林湧き出る響き蝉しぐれ
長き夜やうとうとと聞く深夜便

ゆっくりと生きる歩幅の登山道 福島 有恒
西瓜食む口一杯に陽の甘味
梨園の主とも見えて猫眠る

稜線へ落ち来るやうに夏の星 藤野 徳子
父の背の弾痕憶ふ終戦忌
二科展を出て雑踏へ入る夕べ

紺碧の空を纏ふや椿山 堀部 暁
翠巒の気を頂きてわが余生
くりかへし陽水を聴く長き夜

葉桜やスーツ姿も身について 山田珠真子
紫陽花の色染め直す昨夜の雨
前略と書いて筆置く長き夜

大村 譲さんの思い出

吉 川 浩



私は1967年にサンフランシスコ支店に配属になりましたが支店長は佐藤正和さんでした。陸軍士官学校を卒業されて次のステップである陸軍大学への進学のため今でいうインターンとして旧満州の部隊で研修中に終戦を迎え復員後に神戸大学に進学、卒業したというお方で大変な紳士でしたが職業軍人としてのエリート教育を受けた人が商社におられることにやや違和感がありました。

その後任が繊維部門から来られるというので大阪の繊維商いで鍛えられた所謂商売人タイプの人かと期待していましたが新支店長は理論派で現場主義の私とは肌合いが違うというのが第一印象でした。サンフランシスコ支店には繊維の商いは全くないのに繊維部門からというのはマネジメントの勉強のために会社が派遣したのだと思いましたがアメリカ人も入れて10人足らずの店では勉強になるような材料はあまり無く大村さんは切歯扼腕の毎日だったと思います。

さすがに支店長としての役割、責任は自覚されていました。私が売った旧三菱製鋼の板バネ用鋼材が熱処理するとひび割れが出るという当時としては10万ドル以上の大

きなクレームが発生した時は三菱製鋼の担当常務が出張してこれ何とか解決したのですがこの常務がラスベガスに行きたいということでそれなら俺と一緒に行ってやると大村さんが言って下さりカジノのABCも知らない私は本当に助かりました。

サンフランシスコにはベブルビーチ、スパイグラスなどの有名ゴルフ場を目当てに社内外のおえら方がよく立ち寄られました。失礼ながらゴルフはそれほどお上手ではない大村さんが必ずお供されるのに感心しました。いま思うとこれも支店長の大事な仕事です。

思い出は尽きませんがご冥福をお祈りしながら筆をおきます。



大村 譲さんのご逝去を悼む

長谷川 洋



編集部からの寄稿依頼に対して、小生が果たして、適任かどうか迷ったが、晩年の大村さんとのお付き合いの一端を述べることで、大村さんを偲ぶことにします。

仕事面での大村さんについては、鉄鋼の吉川浩さんが米国駐在時代のことを寄稿されました。

大村さんの訃報を東西の社友に流したところ、早速、田淵弘通さんからは大阪本社・綿糸部時代に、お世話になった、ご冥福を祈るとお悔やみのメールが入った。中川十郎教授からもNY時代にご指導いただいたと、同様に弔意を伝えてきた。その他多くの方々から弔意が送られてきました。その旨、奥様にはお知らせしました。

米国から帰られて業務本部にも居られたと思いますが、その時、部下には大谷毅丈夫さん、故岩下恒則さんたちがご指導いただいたそうだ。

田淵さん、大谷さん、岩下さん、三人とも奇しくも、我等ニチメン33会同期の仲間。

さて大村さん、96歳のご長寿の後に、静かに眠るように逝かれた由。

介護老人ホームに入って間もなくのことだった。

横浜・栗田谷生まれの所謂“浜っ子”だったとは知らなかった。誰かが言っていたが“野武士のような風貌”、面構えだった。昭和24年、一ツ橋大卒、日綿入社、東京支社から大阪本社に移り、まずは綿糸布部出で活躍後、米国駐在に出て、SF 5年、NY 5 + 5年 = 10年なんと米国駐在通算15年とか。

お嬢様は当然、英語がお得意で、帰国後は、わが取引先 YANMAR DIESEL 大石元専務のお子様の家庭教師をされた由。大石さんからは晩年の大村さんの消息を偶にお聞きしました。

さて 晩年までマージャンとGOLFを楽しまれた大村さん。現役時代は、マージャン屋の店主から奥様に電話が入り、今夜は遅くなると、連絡が来るほど、マージャン好きだった由。

小生が、お付き合いしたニチメン湘南GOLF会のこと。

安藤さん、野村さんの大先輩に囲まれても凛として、ご自分の意見を述べていたこと等思い出す。帰りの東海道線車中で、故岩田昭二さん、故島崎京一さんたちと談論風発、会話を楽しんだことを思い出します。

ある日、神奈川県ゴルフ場に、吾々が、倶楽部バスで降り立ったら、大村さんが乗り込んできた。もう帰宅するとのこと、前夜からクラブハウスに泊り込み、マージャンをやったので、プレイせずに帰るとのことだった。ゴルフよりマージャン優先だったとは、吃驚した。

あの世で、安藤さん、野村さんにお会いして“遅くなりましたが只今参上、マージャンでも如何ですか”、と言っているかも。

96年、いい人生だったと思います。ゆっくりお休みください。

ニチメン東京社友会会員名簿 (2019年9月30日現在)

編 集 部

従来より会員名簿を隔年発行し、会員各位にお届けしておりましたが、「個人情報」の管理体制強化の為、一昨年発行の名簿を最終版として今後の名簿発行を休止します。

会員各位にはご不便をおかけするかも知れませんが宜しくご理解いただきたくお願いいたします。

お願い：

- ① 社友会事務局で一元管理しますので、住所及び連絡先などの変更は必ず事務局へご連絡ください。
- ② また、過去の名簿の取扱いについては個人情報が漏洩しないようご注意ください。
- ③ 過去の名簿の破棄、処分される場合は、必ず焼却あるいはシュレッダーしてください。
尚、社友会あて郵送、あるいは年2回の会合時にご持参いただければ、事務局で処分させていただきます。

ア行 : 101名

相原淳雄	青木聡弥	青木繁行	青木 浩	青木政和	赤城枝美
赤澤宏哉	阿賀信夫	我妻寿一	阿久津佳子	浅井正彦	浅子豊治
浅利真司	芦村八郎	東 信子	天野雅光	甘利 廣	新井康友
荒木武雄	池田照幸	池永 浩	石井光雄	石川勝美	石川博保
石黒由紀子	石原 清	石原啓資	石原靖造	泉 伸夫	五十畑利江
井田龍夫	井田正従	市川伸江	市川元久	糸井康雄	伊藤尚志
伊藤安雄	糸川良平	井上正博	今井 明	今井宏臣	今村隆夫
入江隆史	入野英次	岩居宏一	岩井 修	岩上敦司	岩田 功
上田吉彦	上野通明	植村邦彦	上房康成	上村哲嗣	宇治田薫
内田英三	内田鏝一	内田宗興	内山田純一郎	宇津木長	内海和男
梅原郁朗	海野敏夫	浦野由紀夫	漆崎隆司	大北克利	大久保海生
大崎隆三	大曾根弘之	太田弘之	大田義美	大建雄志郎	大谷和夫
大谷毅丈夫	大塚静子	大塚健夫	大西 勇	大野悦良	大野久生
大場禎治	大林はる美	大羽陽一郎	大平栗雄	大村善勇	大森啓作
大山弘雄	大山陽子	岡 敦彦	岡島岩男	岡田 茂	岡部健太郎
小蒲智臣	小川哲郎	沖田隆彦	奥田 哲	奥村睦夫	小田有久
尾上鏝一	小野賢次	小野宗一	小野 稔	尾羽澤正敏	

カ行 : 72名

垣田佐代子	笠井公雄	河西良治	風間和彦	数森正彦	勝井嗣雄
勝田泰司	加藤資一	嘉藤節子	金田正博	鏑木順治郎	蒲澤信男
上條達雄	亀田 昭	唐崎和彦	川崎恵美子	川崎秀憲	河路浩吉
川西 勲	川端勝四郎	川畑正巳	河村博行	川本寿彦	上林正嗣
木内純一	菊池省三	木皿重正	木津奈緒子	北井暁夫	北川 敬

北川幸雄	北川嘉雄	喜多嶋雄徳	北野秀明	北村俊夫	木寺厚二
木下龍三	木全磐樹	木村敬男	京野 勉	金城弘明	久世誠司
轡 健一	国峰信成	久芳 成	窪田厚三	久保貞二	倉又則夫
倉持次雄	栗田久彌	栗原靖幸	黒川智水	黒木俊二郎	黒住 厚
黒田克弘	桑島有一	小寺大輔	古藤彰三	後藤厚治	五島慎二
後藤政郎	小西重勝	此田哲也	小橋雅寛	小林斉之介	小林正史
小林昌代	小松重範	菰田雅治	古谷野和夫	近藤厚子	近藤貞一

サ行 : 54名

斎 富造	三枝 伸	斎藤勝吉	斎藤勝義	斉藤至弘	五月女穰
坂井啓治	坂井辰雄	坂井良司	佐久間正光	桜井潤一	桜井征夫
笹原 弘	佐藤悦三	佐藤三朗	佐藤武宣	佐藤鐵雄	佐藤統次
佐藤光治	佐藤由紀恵	佐渡 隆	佐野 進	沢井二三一	三分一克美
篠塚美郷	柴田 実	渋谷 義	渋谷和雄	島田俊彦	清水武人
下浦通洋	霜鳥雅徳	白石哲也	白坂泰之	新藤 孝	新野敬一
陣内義夫	菅沼利太郎	菅野幹二	菅谷省三	杉浦俊之	杉浦幸雄
鈴木讓治	鈴木広明	須藤忠昭	住吉哈爾雄	陶山 晃	関口昌秀
関根潤治	瀬在道晴	芹生 宏	曾我宏司	外林俊浩	園山春一

タ行 : 51名

大工原正徳	高木恒久	高木正博	高瀬 裕	高瀬允宏	高田秀子
高橋卓子	高橋 正	高橋正尚	高濱 悟	田上桂作	高見恒博
竹内可能	武田尚憲	竹村 豊	田尻眞啓	田代充穂	橋 行雄
伊達邦雄	田所忠彦	田中 謙	田中孝平	田中伸介	田中聡太郎
田中 勤	田中偉堯	田中 弘	谷 昌興	谷 道夫	玉井一幸
田村達也	田村順子	丹下 薫	丹野和廣	千田俊章	塚本幸雄
津田賢一郎	土田成穂	土屋秀雄	角掛康弘	寺川行弘	土井安之
外村和之介	土橋昭夫	土橋 勇	富岡矩子	富田 仁	富田 保
豊木啓喜	豊福清二	豊間根政行			

ナ行 : 34名

永井清光	長井 誠	中尾舜一	中川十郎	中島和彦	中田龍彦
永田堅志郎	中谷喜良	中谷宣英	中谷 勝	中西真佐裕	中野次夫
中原正紀	中村静人	名島憲一郎	滑川和子	成宮正和	南部捷郎
南部晴雄	並木 正	西奥薫尚	西川 周	西川真司	西川 洋
西田武弘	西田 昇	西野幸夫	西村昭男	西村照男	西村輝男
西村 弘	庭野松三	野城恒男	野本定男		

ハ行 : 60名

芳賀信明	橋口喜郎	橋爪 覚	橋本昌二	橋本文宏	橋本昌美
蓮沼恒郎	長谷川尚	長谷川洋	初又惇夫	花澤和郎	濱田健滋
浜地道雄	林 博之	林 正弘	林 義人	半林 享	樋口龍彦

久武雅志	久本紘一	平井清文	平石 豊	平井出良彦	平岡昭三
平尾龍介	平川真淳	平野 勉	蛭田恒美	比留間玲子	廣内卓生
廣瀬一彦	廣田益一	廣田雄太郎	廣本昌也	深尾 孝	福井芳樹
福島有恒	福富直明	藤井敬三	藤井正之助	藤井宏憲	藤澤裕武
古川 熙	古澤陽一	古家 章	逸見勝衛	星合良彦	保科 孝
星野則和	細井康男	細井吉一	細谷和夫	細谷 聡	堀田恒雄
秀真正彦	堀江 亘	堀 典江	堀部 暁	本田 務	本間登志雄

マ行 : 48名

前田征雄	前田 孝	牧 洋生	榊瀧磐夫	榊山俊次	松浦 淳
松尾憲一	松岡秀樹	松坂 茂	松沢幸雄	松田邦夫	松田 實
松野 弘	松村信男	松村森男	松本幸子	松本忠夫	松本寿夫
丸野 純	丸山泰三	三浦甲蔵	三木照男	三島光博	水庫博夫
水野英幸	水野隆二	水堀 勤	溝江博三	箕作武彦	三原 均
宮内義彦	宮尾迪子	三宅 葉	宮田信雄	宮本正博	武藤満夫
村井靖武	村岡龍馬	村岡治夫	村上匡一	村上泰生	村澤醇治
茂木良夫	望月昌徳	本松 巖	森 壽朗	森江健児	森田淑子

ヤ行 : 32名

八木 隆	矢島 孝	安井修司	安武国章	八津道夫	柳沢 明
山岸正雄	山口一光	山田寛治	山田喜三	山田直一	山谷敏之
山田廣吉	山邑陽一	山元 哲	山本昌裕	山本康雄	山本幸江
湯浅莊三郎	湯本章人	横井正豊	吉海秀造	吉川敏朗	吉川秀夫
吉川 浩	吉木 健	吉田孝生	吉田修一	吉田俊成	吉野昭一
吉水 稔	吉本邦晴				

ワ行 : 4名

若月義和	渡辺一郎	渡辺耕一郎	渡辺重幸
------	------	-------	------

計456名



訃 報

(2019年1月～2019年8月)

ニチメン東京社友会

※非会員

	氏 名	出身部門	ご逝去年月日	享年
1	※目 黒 実	総 務	2019年 1月 8日	86歳
2	斎 藤 弥	不 明	2019年 2月19日	91歳
3	高 間 宏 治	綿 花	2019年 4月13日	90歳
4	※安 藤 伸 元	機 械	2019年 5月 9日	89歳
5	宮 浦 博	織 維	2019年 5月14日	89歳
6	幾 島 清	食 料	2019年 5月25日	86歳
7	坂 本 晤	食 料	2019年 6月18日	86歳
8	笠 原 聖 子	合成樹脂	2019年 6月30日	79歳
9	大 村 讓	元専務	2019年 8月10日	96歳
10	浮 貝 泰 匡	機 械	2019年 8月19日	80歳

ニチメン大阪社友会

※非会員

	氏 名	出身部門	ご逝去年月日	享年
1	杉 本 幹 雄	織 維	2019年 4月 7日	70歳
2	高 村 博 進	金沢支店	2019年 5月11日	78歳
3	永 田 耕 三	建 設	2019年 8月23日	92歳

ご冥福を、お祈りいたします。合掌



役員・世話人

会	長	石	原	敬	資												
副	会	新	藤		孝												
監	事	大	羽	陽	一	蛭	田	恒	美								
世	話	奥	村	睦	夫												
世	話	青	木	聡	弥	赤	城	枝	美	入	江	隆	史	北	川	幸	雄
		木	津	奈	緒	倉	持	次	雄	近	藤	厚	子	園	山	春	一
		丹	下	薫		中	田	龍	彦	榑	山	俊	次	森	田	淑	子

Nmm

ニチメン東京社友会世話人連絡先

世話人氏名	所属	電話番号	世話人氏名	所属	電話番号
青 木 聡 弥	人事	■ ■ ■ ■ ■ ■	赤 城 枝 美	財務	■ ■ ■ ■ ■ ■
入 江 隆 史	合樹	■ ■ ■ ■ ■ ■	大 羽 陽 一 郎	機械	■ ■ ■ ■ ■ ■
奥 村 睦 夫	木材	■ ■ ■ ■ ■ ■	北 川 幸 雄	機械	■ ■ ■ ■ ■ ■
木 津 奈 緒 子	運保	■ ■ ■ ■ ■ ■	倉 持 次 雄	食料	■ ■ ■ ■ ■ ■
近 藤 厚 子	情シス	■ ■ ■ ■ ■ ■	新 藤 孝	財務	■ ■ ■ ■ ■ ■
園 山 春 一	業務	■ ■ ■ ■ ■ ■	丹 下 薫	紙パ	■ ■ ■ ■ ■ ■
中 田 龍 彦	食料	■ ■ ■ ■ ■ ■	蛭 田 恒 美	燃エネ	■ ■ ■ ■ ■ ■
榑 山 俊 次	鉄鋼	■ ■ ■ ■ ■ ■	森 田 淑 子	紙パ	■ ■ ■ ■ ■ ■



【編集後記】

「会報」27号をお届け致します。

編集にあたり、寄稿者各位、世話人各位、関内印刷の皆様、パソコンに感謝致します。

編集子に届いた挨拶文、写真、寄稿文、掲載資料などを校閲、校正し関内印刷さんへメールで送り込み、ゲラ発行・編集会議・校正を経て発行・会員宛送付となる。

そこで、パソコン（寄稿文受領、手書き原稿・写真のスキャン取込み、写真トリミング、記事送り込みなど）のお世話になる。この大活躍の「パソコン」の威力（ソフト、ハード、周辺機器など）は、今や、手放せない必須の文明の利器で、世界をも大きく変えた。

編集子入社時（昭和45年）の交換手電話、国際電話電報、以降、テレックス、有線から無線、自動車搭載電話、ファックス、Eメール、今で言う「ガラ携」、スマートフォンなど通信技術の超高速進歩に驚かされております。いつまで経ってもその進歩に追いつけない自分だが、人並みぐらいは使いこなせているんだろうなあと自画自賛。

と言うわけで、無事に発行できホッとしております。

広報チームよりのお願い：

皆様には、会員相互の情報提供、随筆、エッセイ、珍譚奇譚、書評、同好会・同期会・OB会ニュース（開催予定、開催報告）、アーカイブス写真（各種会合、仕事関連、課外活動など）等、以前の掲載内容を参考にされ、ご寄稿いただきますようお願い致します。

一方、ホームページの「ふれあいの広場」欄に、①「旅行」②「花や景色」③「読書感想文」④「温泉情報」⑤「健康」⑥「趣味」⑦「美味しい食べ物の店や食べ方」の7つのジャンルを設けておりますので、内容をご覧の上、随時ご投稿ください。

直接にご投稿できますが、不明点などあれば下記までお問合せください。

- 投稿文送り先、問合せなど ⇒ okumura1946@canvas.ocn.ne.jp
- 会報次号（28号、2020年6月1日発行）へのご寄稿の締め切り
⇒ 2020年4月30日（木）

（奥村 睦夫）

ニチメン東京社友会

〒100-8691 東京都千代田区内幸町2-1-1
飯野ビルディング17F

会報発行人：石原啓資

編集担当・広報チーム

リーダー：奥村睦夫

メンバー：入江隆史 北川幸雄

中田龍彦 森田淑子

印刷所：有限会社 関内印刷